

温泉地域研究

第 38号

2022年 3月

論文

- 三重県紀北町古里地区における日帰り温泉施設の観光利用特性
.....磯野 巧 (1)
- 湯治場の共同性とその再構成に関する社会学的考察
——肘折温泉郷を事例として——永岡圭介 (13)

追悼特集

- 山村順次名誉会長追悼特集 (25)
- 辻内和七郎元常務理事追悼 (45)

書評

- 河野 忠著：『弘法水の事典 —日本各地に伝わる空海ゆかりの水—』
.....斉藤雅樹 (47)
- 安田浩一・金井真紀著：『戦争とバスタオル』石川理夫 (48)

温泉地情報

- 宮城県大崎市鳴子総合支所の移転と展望岡村慎一郎 (49)

- 学会記事 (51)

日本温泉地域学会

三重県紀北町古里地区における日帰り温泉施設の観光利用特性

A Characteristic of Tourism Use of a Day-use Hot Spring Facility at Furusato District, Kihoku Town, Mie Prefecture, Japan

磯野 巧*
Takumi ISONO

キーワード：来訪動機 (motivation for visiting)・観光行動 (tourist behavior)・日帰り温泉施設 (day-use hot spring facility)・紀北町 (Kihoku town)

1 はじめに

(1) 研究課題

1988年に導入された「ふるさと創生事業」によって温泉掘削がブームとなった¹⁾。バブル経済崩壊以降、温泉観光地が全国的に低迷していくのに反して、安価で気軽に楽しめる日帰り温泉の需要は大きく高揚した²⁾。また、掘削技術の向上によって非火山地域でも大深度掘削を行うことが可能となり、今や全国各地で温泉資源を確保できるようになった³⁾。

こうした状況下、地方自治体主導による社会福祉や観光振興を目的とした日帰り温泉施設の開発が活発化している。環境省による「温泉利用状況」をみると、温泉利用の公衆浴場数はほぼ一貫して増加傾向を示しており、2019年度の立地件数は7,981と過去最多を記録している⁴⁾。日帰り温泉施設は「安・近・短」志向に対応した観光レクリエーション機能や高ストレス化社会の進行に伴う心身の癒しのためのリラクゼーション機能などを備えており、現代社会に適合した新しい観光資源として位置付けられている⁵⁾。

日帰り温泉を題材とした既往研究をみると、その立地動向や発達要因をマクロに分析した横山 (2002)⁶⁾ や山村・小堀 (2000)⁷⁾、地元住民の日常的な温泉利用やその意識を検討した加藤・鈴木 (2011)⁸⁾ や岡田 (2009)⁹⁾ などが代表的である。一方で、日帰り温泉施設の観光利用については、来訪車台数の季節

変動や時間変動からその利用特性を論じた鈴木・福井 (2005)¹⁰⁾、群馬県の公営日帰り温泉施設の利用実態を解明した湯沢ら (2005)¹¹⁾ の研究がある。しかしながら、ツーリストの来訪動機や観光行動などを精緻に分析した実証的研究は管見の限り少ない。ゆえにツーリストがどのような目的で日帰り温泉施設を訪問し、いかなる行動パターンを有するのか、その詳細は不明瞭な点が多い状況にある。

上述した研究課題の解決に向けて、本研究ではウェブアンケート調査を実施する。1990年代以降、オルタナティブ・ツーリズムの発展に伴って観光行動も多様化し、ツーリスト自体の行動分析の必要性が高まっている¹²⁾。こうした状況下、観光地理学の分野において、アニメに関する若者の観光・レジャーの実態¹³⁾ やツーリストのSNS利用¹⁴⁾、大規模農産物直売所の利用特性¹⁵⁾、若者のJリーグ観戦に伴う観光行動¹⁶⁾などを把握する目的でウェブアンケート調査が採用されてきた。

ウェブアンケート調査は十分なサンプル数を確保できるのに加えて、対面調査の困難さを打開するうえで有用である¹⁷⁾。日帰り温泉施設に関しても、リラクゼーション目的で訪問するツーリストが大半を占めるため、入浴前後に精緻な対面調査を実施するのはハードルが高いと予想される。よって、ウェブアンケート調査は日帰り温泉施設の観光利用実態の解明を試みる本研究の分析方法として妥

*筑波大学生命環境系 (Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba)

当であると判断した。

(2) 研究目的と方法

本研究では三重県紀北町古里地区に立地する「きいながしま古里温泉」を対象として、観光目的地としての当地の性格に着目しつつ、利用者である観光客の来訪動機や観光行動を分析し、日帰り温泉施設の観光利用にみられる現状と課題を明示する。

きいながしま古里温泉は、紀北町の観光振興の一環で設けられた公営の日帰り温泉施設である。当該施設は小規模ながらも、関西や東海地方をはじめ、広域的な集客圏をもつ。近年では交通環境の改善によって気軽に紀北町に赴くことが可能となり、当該施設利用者の旅行目的も多様化傾向を示している。それゆえ観光資源としての日帰り温泉施設の位置づけや利用促進を検討するうえで、きいながしま古里温泉を好例施設として選定した。

調査方法として、紀北町商工観光課に対して古里地区を中心としたツーリズムの現状や観光政策、きいながしま古里温泉の開設背景に関する聞き取り調査と資料収集を実施した。きいながしま古里温泉には施設概要や利用状況に関わる聞き取り調査と資料収集を行った。観光客にはウェブアンケート調査を実施し、きいながしま古里温泉の利用状況の把握を試みた。ほか、メディア記事や各種ウェブサイト、郷土史、三重県雇用経済部による観光レクリエーション入込客数推計書(2019年度版)¹⁸⁾などを資料として用いた。

(3) 研究対象地域

紀北町は東紀州地域¹⁹⁾に位置し、尾鷲市、大紀町、大台町、奈良県上北山村と隣接している(図1)。2005年10月に北牟婁郡旧紀伊長島町と旧海山町が合併して発足した。

紀北町は大台山系から連なる急峻な山々と熊野灘特有のリアス海岸に囲まれており、平野部が少ない。総面積256.53km²のうち89.6%が森林である。紀北町は黒潮の影響で比較的温暖な気候を有しており、2006年から2015年の平均気温は16.1℃である²⁰⁾。

交通環境をみると、国道42号線が町域を南北に貫いている。また、紀勢自動車道が2013年3月に紀伊長島ICまで、2014年3月に紀伊長島ICから海山ICまで延伸したことで、名古屋市から紀北町までの所要時間が約2時間に短縮された。鉄道網については、JR紀勢本線が縦断しており、町域に紀伊長島、三野瀬、船津、相賀の4駅が設けられている。

2 観光目的地としての紀北町の性格

(1) 観光統計にみる東紀州地域

東紀州地域を訪問した観光客の居住地をみると、三重県(45.2%)が約半数を占めている(図2)。これに愛知県(23.0%)が続き、両県からの訪問が全体の約70%となっている。これに対して、関東地方(2.2%)やそのほか(1.1%)からの訪問は少ない。ゆえに伊勢志摩を除く他地域と同様、東紀州地域の集客圏は比較的狭域と言える。

旅行目的をみると、「自然や風景を見てまわる」(47.9%)や「おいしいものを食べる」

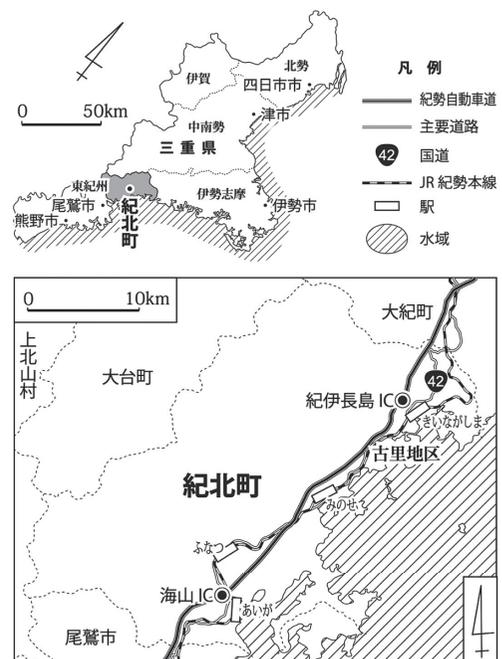


図1 研究対象地域(2021年)
(注)筆者作成。

(33.6%)、「のんびり過ごす」(23.4%)、「ドライブ・ツーリング」(20.8%)と回答した観光客が多い(図3)。なかでも、「ドライブ・ツーリング」は他地域と比較して最も高い数値を示している。「温泉を楽しむ」に関しては、湯治場として知られる榊原温泉などを有する中南勢地域(18.8%)と比較して、東紀州地域(12.4%)の数値は相対的に低い。

(2) 紀北町の観光資源および観光施設

「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界文化遺産に登録された2004年以降、紀北町の観光入込客数は継続的に増加した(図4)。これは紀勢自動車道が2006年以降段階的に整備されたことも影響している²¹⁾。2011年から2013年にかけて観光入込客数は減少傾向に転じたが、紀伊長島ICの開通(2013年)や世界遺産登録10周年記念イベントの開催(2014年)などによって再び上昇傾向を示した。2017年以降は150万人前後を推移している。

主要観光資源をみると、紀伊長島マンボウと海山の両道の駅が紀勢自動車道のIC付近に立地している(図5)。観光入込客数は2015年に開設した始神テラス(紀北町PA)

が最多である。熊野古道伊勢路については、荷坂峠、ツヅラト峠、三浦峠、始神峠、馬越峠の5コース、総延長8.8kmの古道遺跡が世界文化遺産に登録されている²²⁾。町域南部には清流として注目を集める銚子川が流れている。ほか、古里地区を中心に海水浴場が分布している。

宿泊施設に関しては、古里、道瀬、相賀の各地区に複数立地しており、とくに古里地区は民宿雨の集積が顕著である。東長島地区に

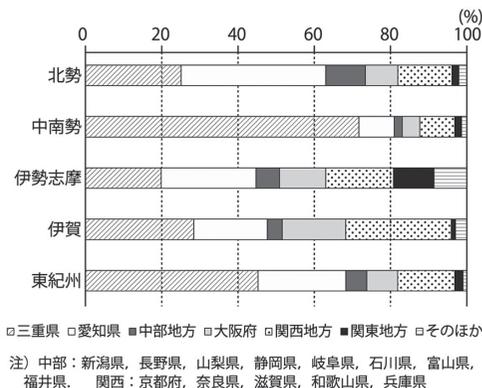


図2 地域別にみた観光客の居住地(2019年)
(注) 三重県雇用経済部資料により筆者作成。

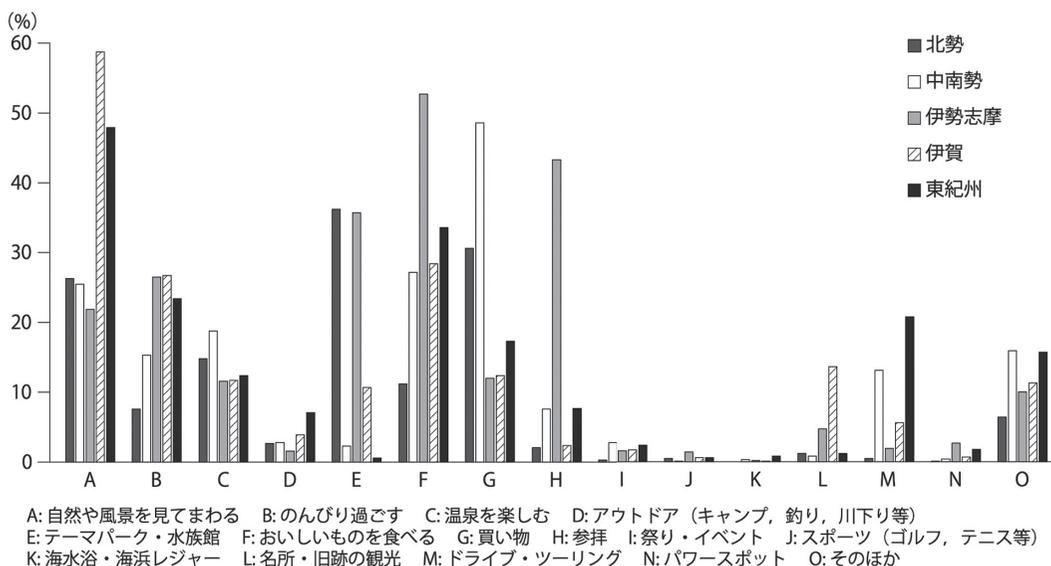


図3 地域別にみた観光客の旅行目的(2019年)
(注) 三重県雇用経済部資料により筆者作成。

は大規模なホテルが設けられている。ほかにも、キャンプinn海山やきいながしま比叢海岸オートキャンプ場、MAC孫太郎オートキャンプ場などのキャンプ施設が点在する。

大都市からの近接性が高まったことを受け、紀北町では自然豊かで温暖な気候を強みとする合宿誘致に着手している。近年では体験型イベント交流施設「けいちゅう」（2006年）、東長島スポーツ公園や大白公園（2013年）が整備されている。なお、先述した宿泊施設の大半が合宿客を受け入れている。

3 きいながしま古里温泉のあゆみ

(1) 観光目的地としての古里地区

古里地区は紀伊長島ICより約6km南方に位

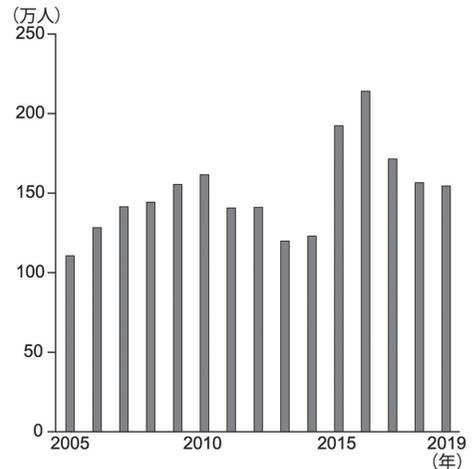


図4 紀北町における年別観光入込客数推移 (2005-2019年)

(注) 三重県雇用経済部資料に筆者作成。

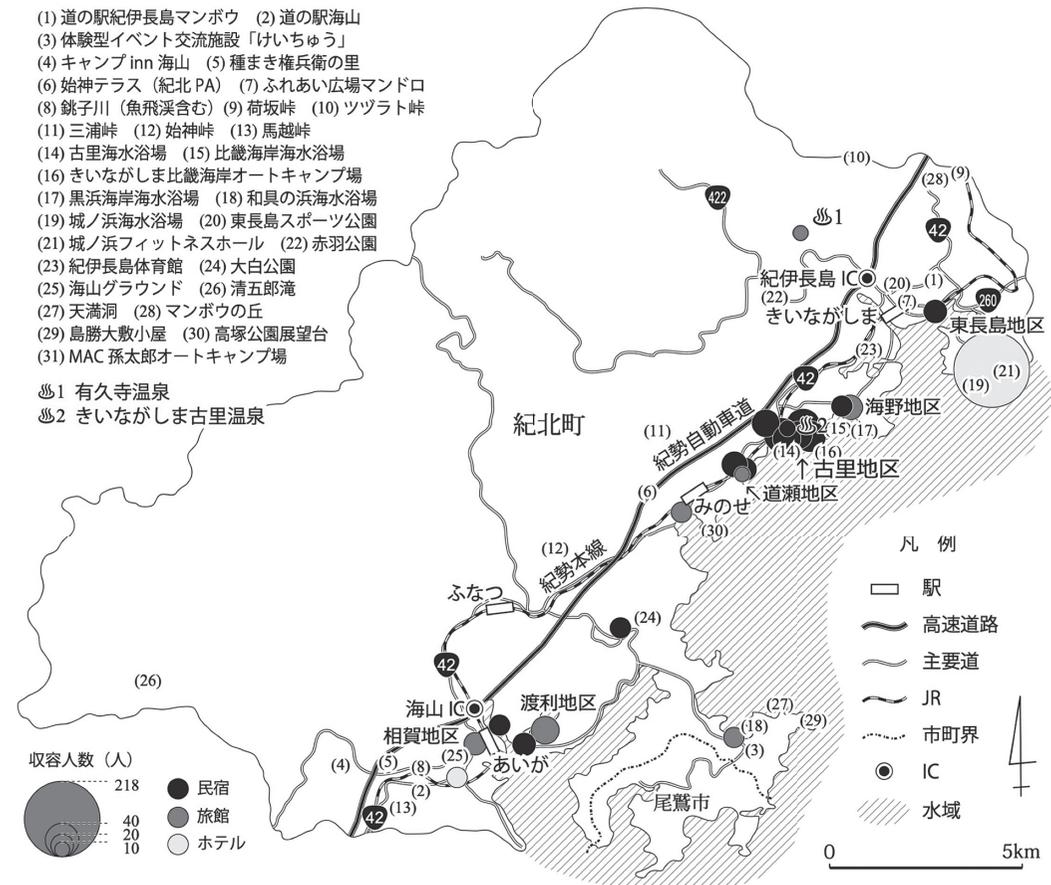


図5 紀北町における主要観光資源・スポーツ施設・宿泊施設の分布および宿泊施設の収容人数 (2021年)
(注) 紀北町商工観光課提供資料により筆者作成。

置する。公共交通機関を利用する場合、紀伊長島駅よりバスに乗車し、「古里」で下車することになる。

国道42号線が整備された高度経済成長期以降、古里地区に海水浴場が多数開設し、夏季になると海水浴客で賑わっていた。同時期に民宿の開業が相次ぎ、「古里海岸民宿村」が形成された。1960年代中頃には古里観光協会が設立され、大都市からのバスツアーの対応などに従事していた。

観光目的地として最盛期を迎えた1970年代後半、古里地区には30軒近くの民宿が立地していたが、それ以降は減少傾向にある。近年では合宿の受け入れによって、宿泊客の属性が変化しつつある。また、古里地区は柑橘栽培が盛んなため、ミカン狩りや直売所での農作物購入を目的とする来訪も目立つ。

(2) きいながしま古里温泉の概要

1970年に策定された「熊野灘レクリエーション都市整備計画」の一環として、旧紀伊長島町では海岸地域を中心に観光開発が推し進められてきた。ゆえに当地を訪れる観光客の主目的は「海」に関わるものが中心であり、その来訪時期は夏季に特化していた。

このような状況下、旧紀伊長島町は通年型観光を実現すべく、1993年に「ホリステック・リゾート整備構想」を打ち出した。その一環で古里地区に日帰り温泉施設が整備されることとなった²³⁾。1993年に温水脈空中探索事業と温泉本掘削事業が、1995年に建設工事設計監理業務、用地測量業務、源泉湯湯設備工事、新築工事といった温泉開発事業が行われ、1996年4月に「きいながしま古里温泉」が開設した。以降、2000年に休憩室増築工事と駐車場整備、2007年に浴室改修工事が行われた。温泉の湧出地は古里地区にあり、泉質はナトリウム-炭酸水素塩温泉、泉温は源泉34.6℃、成分はpH値8.0である。

当該施設の管理運営は紀北町からの委託により古里地区自治会が担っている。利用料金は大人520円、シニア(65歳以上)420円、

小学生310円、障がい者420円、小学生以下は無料である(2021年3月時点)。きいながしま古里温泉は年中無休で営業しており、10時から21時まで利用可能である²⁴⁾。

利用者は平日の約70%が地元住民である一方、土日祝日になると紀北町外からの訪問が60%近くを占めている。年間利用者数をみると、最盛期は6万人程度であったが、2010年以降は緩やかな減少傾向を示している(図6)。古里地区に立地する民宿の大半は大浴場を設けておらず、隣接するきいながしま古里温泉に足を運ぶ宿泊客も多かった。しかしながら、世界文化遺産登録後に紀北町の交通環境が段階的に改善されると、宿泊需要の落ち込みにより廃業する民宿が相次いだ。このことは、きいながしま古里温泉の利用にも少なからず影響を与えた。こうした状況下、古里民宿組合では2008年11月より「湯治の宿」として民宿ときいながしま古里温泉をセットで売り出している。特典や特別価格を設定のうえ、当該施設の泉質や効能を強調したプロモーションを展開している(写真1)。

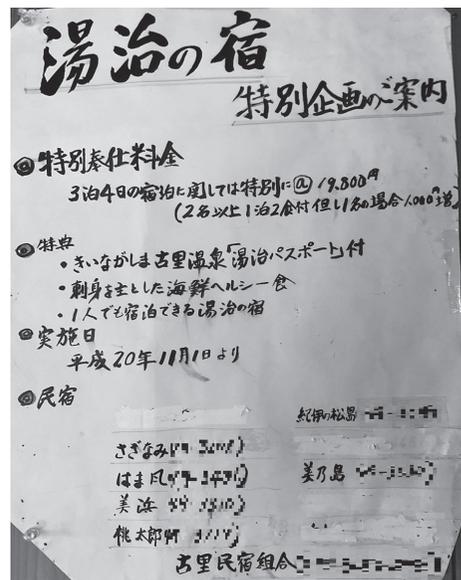


写真1 古里民宿組合による特別企画のチラシ
(注)筆者撮影。2021年2月17日。

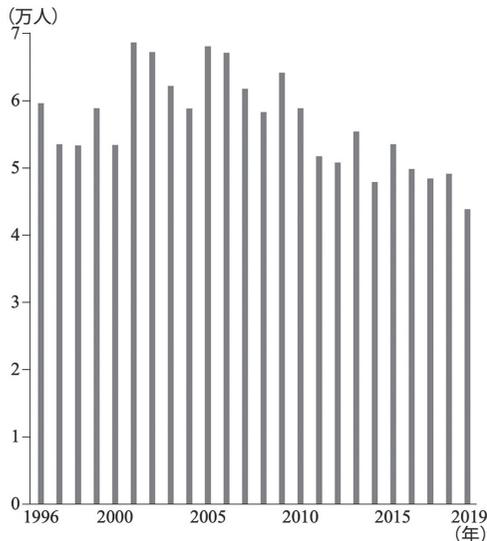


図6 きいながしま古里温泉の利用者数推移 (1996-2019年)

(注) 紀北町商工観光課提供資料により筆者作成。

4 きいながしま古里温泉の観光利用

(1) ウェブアンケート調査の概要

本研究のウェブアンケート調査は株式会社マクロミルに委託した。実施期間は2021年3月22日から3月23日である。本調査では事前にスクリーニング調査を実施しており、「2013年以降、きいながしま古里温泉を訪ねたことがありますか?」という質問に「はい」と回答した人のみが対象となっている(2021年3月17日)。そのうえで、回答者の基本属性を考慮しつつ、彼らに対して当該施設への訪問回数、同行者、旅行目的、訪問目的、満足度、情報入手手段、観光行動、古里地区に対する観光イメージについて訊ねた。古里地区に対する観光イメージに関しては自由記述形式で質問した。

本調査で回収したサンプル数は計208人である(表1)。回答者の性別は男性148人(71.2%)、女性60人(28.8%)と男性の方が多い。年齢をみると、20-24歳が7人(3.4%)、25-29歳が16人(7.7%)と若干少ないが、30歳以上は20~35人となっている。なお、きいながしま古里温泉の利用状況²⁵⁾を鑑み

て、回答者の居住地は概ね三重県30%、関西地方20%、東海地方30%、そのほか20%となるよう事前に調整した。

(2) ツーリストによる利用状況

訪問回数は「1回」が123人(59.1%)と最多であり、「2回」50人(24.0%)、「3回」22人(10.6%)と続く(図7)。居住地別にみると、三重県民の大半は2回以内の訪問が目立つ一方、3回以上の利用経験をもつリピーターは三重県民以外に顕著である。同行者については家族で訪問したものが多く、「団体(サークル・ゼミ旅行・合宿など)」で訪問した回答者はほぼいなかった(図8)。

東紀州地域におけるツーリストの主たる旅行目的は審美性の高い自然景観の鑑賞や豊かな食の堪能であり、「温泉を楽しむ」ために当地に赴くものは統計上少ない。にも関わらず、きいながしま古里温泉訪問時の旅行目的は「温泉入浴」148人(71.2%)が群を抜いて多かった(図9)。また、回答者の大半が宿泊の有無に関わらず「主たる目的で訪問した」ないし「主たる訪問先ではないが、元々立ち寄りつもりでいた」と答えている(図10)。当該施設に対する満足度をみると、「泉質・効能」129人(62.0%)や「温泉の温度」122人(58.7%)と温泉の質的側面を評価する回答が目立つ(図11)。古里地区に対する観光イメージについても、きいながしま古里温泉の泉質を挙げるものが一定数いる(A-1,2,3)。事実、彼らは古里地区を「温泉目的で訪問する場所」と認識する傾向にある(表2)。

回答者の情報入手手段をみると、「ウェブサイトを見て知った」が57人(27.4%)と最多であり、これと「SNSを介して知った」および「雑誌を見て知った」は三重県民以外の割合が高い(図12)。きいながしま古里温泉は泉質や効能を強みとしており、それらは高評価を得ていた。その評判は広く伝播しており、入念な下調べのうえ、「気持ちの良い温泉に入る」や「温泉で心と体を癒す」ために遠路はるばる訪れた回答者もいる(A-5,6)(表

2)。彼らは紀伊長島ICや海山IC付近、当該施設までの道中にある観光資源以外にほとんど立ち寄っていない(図13)。ゆえに当該施設を主要観光資源と捉える傾向が強いと思われる。

これに対して、三重県民は「温泉を楽しむ」ことに加えて、「ドライブ」を旅行目的とするふしがある(図9)。理由として、県内主要都市から紀北町への近接性の向上が指摘できる。その結果、彼らは当地にドライブがてら

表1 回答者の基本属性(2021年)

項目	選択肢	N	%	項目	選択肢	N	%
性別	男性	148	71.2	年齢	-19	0	0.0
	女性	60	28.8		20-24	7	3.4
	合計	208	100		25-29	16	7.7
					30-34	35	16.8
居住地	三重県	62	29.8		35-39	24	11.5
	関西地方	42	20.3		40-44	26	12.5
	東海地方	62	29.8		45-49	30	14.4
	そのほか	42	20.2		50-54	21	10.1
	合計	208	100		55-59	22	10.6
					60-	27	13.0
			合計	208	100		

(注) アンケート調査により筆者作成。

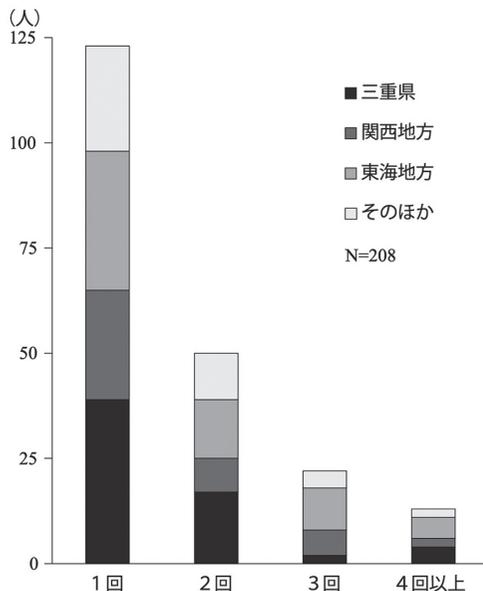


図7 きいながしま古里温泉への訪問回数(2021年)

(注) アンケート調査により筆者作成。

気軽に赴くことが可能となった。また、遠方に居住する回答者と同様、交通の結節点付近や当該施設周辺への訪問率が高く、なかでも「道の駅紀伊長島マンボウ」は顕著である(図13)。さらには尾鷲市や熊野市の観光名所に立ち寄った者も一定数確認される。情報入手手段は「偶然通りかかって見つけた」や「観光協会や道の駅で知った」が目立ち、訪問目的も「立ち寄るつもりはなかったが、現地で情報を入手して訪問した」という回答が少なからず存在する(図10, 12)。よって、周遊観光の一環で、現地での意思決定のうえ、当該施設に足を運んだものも多いと思われる。

最後に、古里地区に対する観光イメージを、温泉資源、温泉を中心とした地域環境、地域環境(温泉以外)、そのほかに区分して分析する(表2)。先述の通り、当該施設の「温泉資源」そのものを高く評価した声が回答者の居住地を問わず多かった。温泉を中心とした地域環境をみると、当該施設での入浴に加えて釣りや海水浴、マリレジャーを楽しんだり(B-1,2,3,4,5)、食を堪能したり(B-

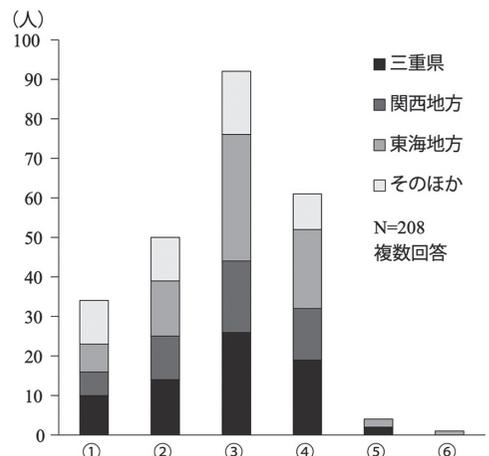


図8 きいながしま古里温泉訪問時の同行者(2021年)

(注) アンケート調査により筆者作成。

表2 古里地区に対する観光イメージ(2021年)

<p>【A. 温泉資源】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 良質な泉質を堪能できる温泉がある場所(三重1:関西1:東海1:ほか1) 2. 熊野古道や海も近い、そして泉質の良い温泉のある場所(三重1) 3. 田舎ならではの風情と温泉の効能を楽しめる場所。お宿も非常に雰囲気良く、地元の方々と触れ合えて良かった(三重1) 4. 情緒ある温泉を満喫できる場所(三重3;関西1) 5. 気持ちの良い温泉に入れる場所(関西1:東海1:ほか3) 6. 温泉で心と体を癒す場所(ほか2) 7. 近くでのんびり温泉で癒される場所(三重1) 8. 隠れ家的な温泉スポット(関西1) 9. 温泉目的で訪問する場所(三重3:東海4:ほか3) 	<p>【C. 地域環境(温泉以外)】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 自然を楽しめる・癒される場所(三重12:関西10:東海6:ほか3) 2. 自然豊かな地域で、ゆったりと時間がすぎるのを味わうことができ、自分を取り戻せる場所(三重1:ほか4) 3. 風光明媚な場所(関西1:ほか2) 4. 風光明媚!ドライブでもツーリングでも楽しめる場所(三重1) 5. 田舎の良い雰囲気のある場所(三重1:関西3:東海8) 6. 民宿が多いところで沖にいくつもの島々が浮かぶ太平洋を一望できる景勝地(ほか1) 7. 海水浴を楽しむ場所(三重3:関西2:東海1) 8. 釣りを楽しむ場所(三重1:関西1:東海1) 9. マリンスポーツを楽しむ場所(東海1) 10. 川が綺麗でキャンプ場があり、自然を楽しみながら遊べる場所(関西1) 11. 三重県内に居住しながら立ち寄ることのなかった場所。田舎っぺいが、清流で有名な銚子川があり、風光明媚なのんびりできる意味ではとても良い場所だと思う(三重1) 12. 三重県内に住んでいるが、日常を忘れられる特別な場所(三重1) 13. リフレッシュしたいときに行く場所(三重1) 14. 近場で憩いのある観光地(関西1) 15. 熊野古道を感じさせてくれる場所(東海1) 16. 史跡観光を楽しむ場所(ほか1) 17. 地元の人との交流が楽しめる場所(東海1)
<p>【B. 温泉を中心とした地域環境】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 温泉に浸かったり、釣りを楽しむ場所(三重2) 2. 温泉や海水浴でリフレッシュでき、郷土料理が美味しい場所(関西1) 3. 海水浴を楽しむ場所が近隣にいくつかあり、ほどよい距離に温泉がある場所。温泉に立ち寄って疲れを取り、入浴後もゆっくりとくつろげやすスペースがあり癒される(東海1) 4. 温泉と海水浴が楽しめる場所(ほか1) 5. ダイビングの道中に立ち寄れる温泉のある場所(東海1) 6. おいしい海の幸に温泉と、自宅から3時間程度で訪問できる、日帰りドライブにちょうどよい場所(関西1) 7. 近くには新鮮な魚介類を食べることができ、温泉にも入ることができ、ゆったりゆったり過ごすことができる場所(東海1) 8. 快適な立ち寄り温泉と食べ歩きができる場所(東海1) 9. 愛知県から近く、日帰り温泉に入って、昼飯や夕食を食べてから帰ることができる。また、観光地を巡りながら夕食を食べて温泉に浸かって宿泊するなど、気軽に行ける場所(東海1) 10. アクセスが不便なのが玉に瑕だが、海の幸は最高に美味しいし、あまり混んでいなかったので温泉でもゆっくりできる。景色も最高で温泉地として必要な条件を十分満たしている場所と思う(関西1) 11. 昔懐かしい気分になれる温泉や土地の人、食べ物に癒される充電できる場所(三重1) 12. 温泉と風景を楽しむ場所(ほか1) 13. 刺身がうまい。そして温泉が良い場所(東海1) 14. 温泉しか行っていないので、他にも何かあれば行きたい(東海1) 15. 古くからの伝統ある地区で、温泉がとにかく良い。さすがは紀伊だかあると思う(関西1) 16. のんびりと日ごらの疲れや仕事を忘れて、家族でまったりとできる場所。温泉にゆっくり浸かって満足感を得ることができた(三重1) 	<p>【D. そのほか】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. おいしい食べ物を食べてくつろげる場所(三重1:ほか1) 2. 気候も温暖で食べ物も美味しい場所(東海1) 3. 海の幸を楽しむ場所(三重3) 4. 12月に行われる「きいながしま港市」が行われる場所(三重1) 5. 道の駅マンボウでランチを楽しむ場所(三重1) 6. ミカンと田舎の風景がある場所(三重2:東海1:ほか1) 7. 自宅から2時間程度の日帰り可能な場所。気軽にドライブで遊びに行ける場所。帰りは下道を走ればちょこちょこ寄り道ができるので、距離的にちょうどよい(三重1) 8. 行きやすい場所(三重1) 9. 遠方ののんびりとした温泉地(ほか1)

注) 括弧内の地名は居住地、数字は回答者数を意味する。

(注) アンケート調査により筆者作成。

2,6,7,8,9,11,13)する場所と認識する回答者が目立つ。また、比較的近距离にある温泉地と捉えている回答者も複数いた(B-3,6,9)。なお、これらに関しても居住地別の差異はみられなかった。

温泉以外の地域環境については、「自然を楽しめる・癒される場所」としての古里地区を思い描く回答者が大多数を占めている(C-1)。リアス海岸が織りなす景観美に強い印象を残したのも複数おり(C-3,4,6,11)、自然資源を活かしたアウトドア・レジャーを満喫する場所と想起するものも散見される(C-7,8,9,10)。そのほかの項目をみると、特産品を堪能できる場所という回答が複数あった(D-1,3,4,5,6)。また、程よい距離にあ

り気軽に訪問できるため古里地区を選択した回答者もいた(D-7,8)。なお、温泉以外の地域環境とそのほかの半数以上は三重県民による意見であった。

5 おわりに

本研究ではきいながしま古里温泉の観光利用にみられる現状と課題を検討した。その結果は以下のようにまとめられる。

きいながしま古里温泉は決して良好とは言えない立地条件下にも関わらず、関西や東海地方を中心に広域的な集客圏を形成していた。その基盤には温泉資源の「質」があり、それが強固な魅力となって遠方からの訪問意欲を喚起していた。

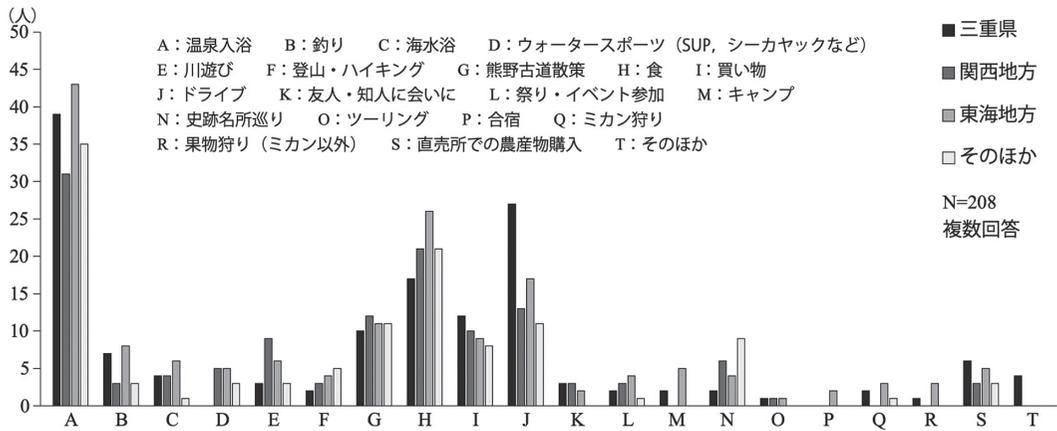


図9 きいながしま古里温泉への旅行目的(2021年)
(注) アンケート調査により筆者作成。

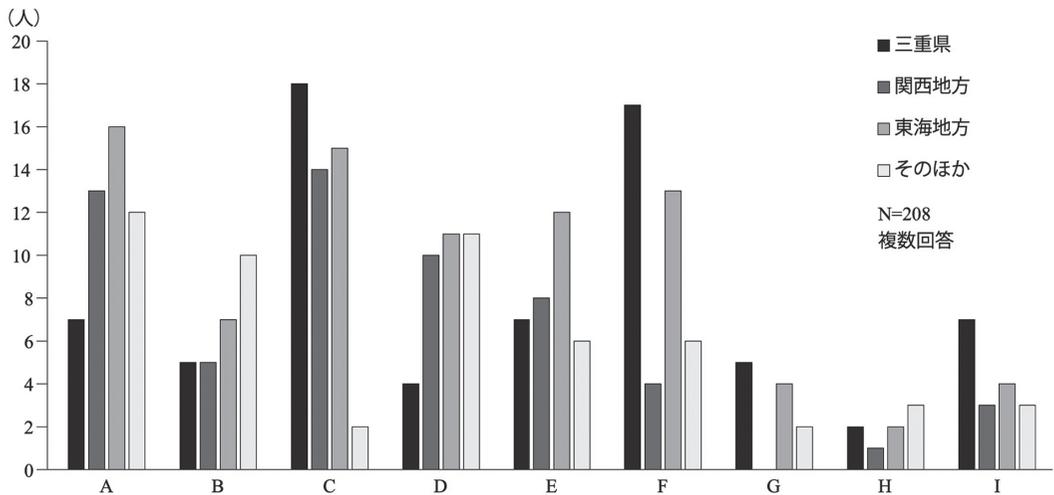


図10 きいながしま古里温泉への訪問目的(2021年)
(注) アンケート調査により筆者作成。

ウェブアンケート調査を実施した結果、ほとんどの回答者が温泉資源に高評価を示していた。一方で、回答者の居住地によって来訪動機や観光行動に若干の差異がみられた。三重県民は周遊観光の一環で紀北町に赴き、きいながしま古里温泉のほかにも自家用車で立

ち寄りやすい観光資源に訪れる傾向にあった。それゆえ当該施設への訪問が主たる旅行目的でないものも少なからず存在し、偶発的な立ち寄りも散見された。

これに対して、三重県民以外、すなわち遠方に居住する回答者は明確な訪問意思をもつ

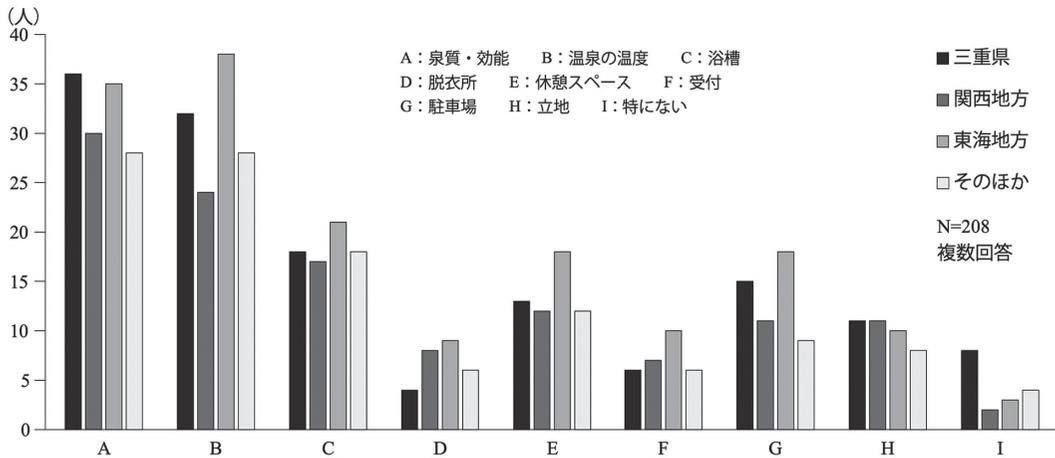


図11 きいながしま古里温泉に対する満足度(2021年)

(注) アンケート調査により筆者作成。

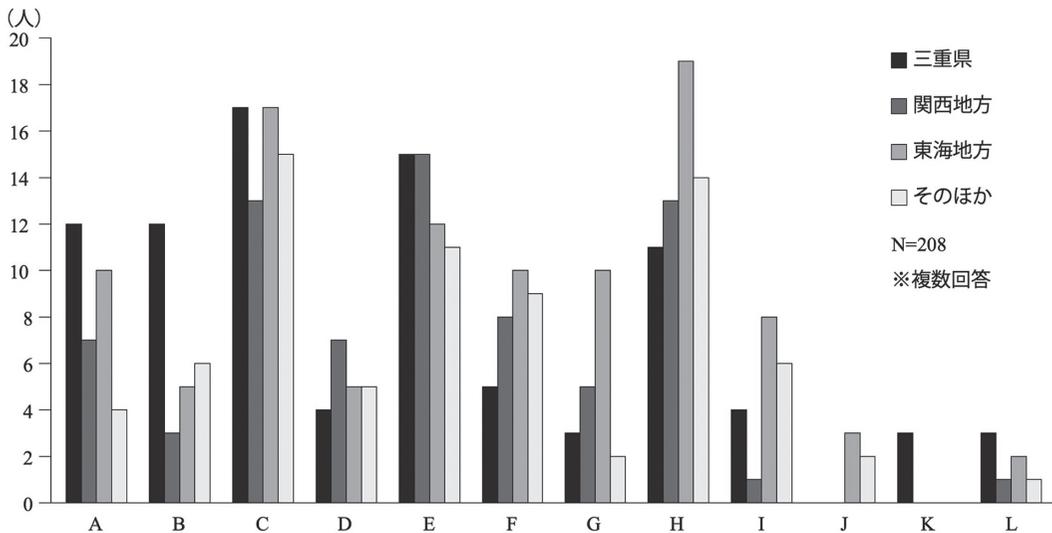


図12 きいながしま古里温泉に関する情報入手手段(2021年)

(注) アンケート調査により筆者作成。

傾向がみられ、当該施設を単一目的地とするものも確認された。そのため、三重県民と比較して行動範囲も狭小であることが窺える。

日帰り温泉施設は増加の一途を辿っており、施設間の過当競争が発生しがちである。ゆえに継続的な観光利用を促進するには、新

規顧客の獲得はもとより、リピート率の更なる向上が必須である。きいながしま古里温泉の場合、利用頻度の高いリピーターは遠方から赴く傾向にある。彼らは今後も当該施設の重要な顧客であり続けるだろう。

一方で、東紀州地域を訪れるツーリストの

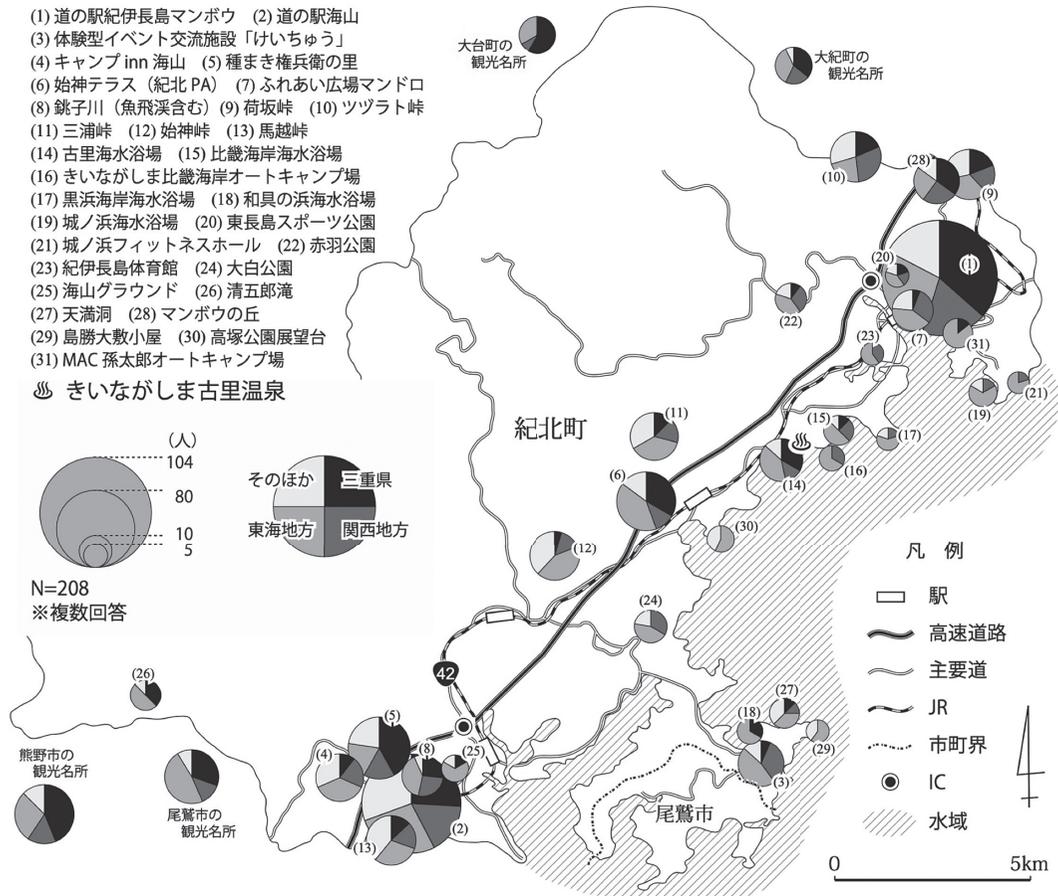


図13 きいながしま古里温泉訪問時の観光行動(2021年)

(注) アンケート調査により筆者作成。

半数近くが三重県民である。彼らは風光明媚な自然景観の鑑賞を主たる旅行目的とし、物見遊山の周遊観光を好む傾向が強い。2021年8月に熊野尾鷲道路が全線開通し、東紀州地域の回遊性は格段に向上した。ゆえに県内ツーリストは今後一層の増加が見込まれる。よって、彼らを取り込むこともまた重要となる。そのためには、紀北町および東紀州地域への訪問ないし再訪意欲を鼓舞する仕組みを確立させ、きいながしま古里温泉の周遊観光における位置づけ、すなわち「立ち寄り地」としての存在感を押し出すことが有効になると思われる。

ほか、合宿客による温泉利用も無視できない。合宿誘致に伴って練習後にきいながしま

古里温泉で疲れを癒す合宿客が増えている。その結果、古里地区は「良質な温泉資源をもつ合宿地」という性格を帯びつつある。こうした状況下、近年では合宿客がツーリストとして当該施設を再訪する事例も見受けられる。それゆえ合宿客に対する観光ニーズ調査を実施することも、継続的な観光利用の在り方を検討するうえで有意義であろう。この点については稿を改めて検討したい。

付記

現地調査に際し、紀北町商工観光課の玉津裕一様と野中周様、きいながしま古里温泉館長の中野智様、紀伊の松島の大西孝政様、株式会社三重ティーエルオー松井純様

と上井大輔様には格別のご配慮を賜りました。末筆ながら記して感謝を申し上げます。

本研究は三重大学共同研究「さいながしま古里温泉改修計画に関わる調査研究」(研究代表者:磯野 巧)による成果である。本研究の遂行にあたり、JSPS科学研究費補助金(若手研究、19K20566、研究代表者:磯野 巧)の一部を使用した。

注・参考文献

- 1) 山田耕生(2007):「温泉地活性化と地域内部の人的要因—山形県米沢市小野川温泉を事例に—」『立命館地理学』第19巻、13-25頁。
- 2) 横山秀司(2002):「九州における日帰り温泉の構造分析」『商経論叢』第42巻第4号、29-49頁。
- 3) 山村順次・小堀貴亮(2000):「東京周辺における日帰り温泉地の地域的展開」『観光研究』第12巻第1号、1-8頁。
- 4) 環境省「令和元年度温泉利用状況」https://www.env.go.jp/nature/onsen/pdf/2-4_p_1.pdf (2021年8月21日閲覧)
- 5) 前掲3)。
- 6) 前掲2)。
- 7) 前掲3)。
- 8) 加藤京里・鈴木聡美(2011):「地域住民は温泉に何を求めているのか—温泉施設利用者への意識調査—」『日健医誌』第20巻第1号、23-30頁。
- 9) 岡田真平(2009):「日帰り温泉施設の利用と健康状態、生活習慣、健康関連QOLとの関連—市民及び施設利用者を対象としたアンケート調査の結果から—」『信州公衆衛生雑誌』第2巻第1号、46-47頁。
- 10) 鈴木尚通・福井幹彦(2005):「三遠南信地方の日帰り型温泉施設における観光・交流人口の動向」『地域総合研究』第5巻、93-138頁。
- 11) 湯沢 昭・星 啓・塚田伸也(2005):「公営日帰り温泉施設の利用実態と効果に関する—考察—群馬県を事例として—」『都市計画論文集』第40巻第3号、913-918頁。
- 12) 呉羽正昭(2014):「日本の観光地理学研究におけるフィールドワークに関する—考察—」『人文地理学研究』第34巻、95-106頁。
- 13) 小池拓矢・杉本興運・太田 慧・池田真利子・飯塚 遼・磯野 巧(2017):「東京大都市圏における若者のアニメに関連した観光・レジャーの特性」『地理空間』第10巻第3号、125-139頁。
- 14) 福井一喜(2019):「東京大都市圏に居住する若者の観光・レジャーにおけるSNS利用—「SNS映え」を超克する若者たち—」『E-journal GEO』第14巻第1号、1-13頁。
- 15) 磯野 巧(2021):「三重県津市における大規模農産物直売所の利用特性—高野尾花街道『朝津味』の事例—」『三重大学教育学部研究紀要(人文科学)』第72巻、127-139頁。
- 16) 鈴木祥平・杉本興運(2021):「若者サッカーファンとスポーツツーリズム—盛り上がるJリーグ観戦—」、杉本興運・磯野 巧編『若者と地域観光—大都市のオルタナティブな観光的魅力を探る—』ナカニシヤ出版、110-122頁。
- 17) ただし、登録モニターが大都市圏に集中し、年齢構成も30~40歳代に偏る傾向があることを考慮する必要がある。
- 18) COVID-19による影響を考慮し、2019年度版の観光統計を用いることにした。
- 19) 東紀州地域は尾鷲市、熊野市、紀北町、御浜町、紀宝町の5市町からなる地域を指す。
- 20) 紀北町「紀北町第2次総合計画」<https://www.town.mie-kihoku.lg.jp/material/files/group/8/h29sougoukeikaku.pdf> (2021年8月21日閲覧)
- 21) 磯野 巧(2019):「三重県南部地域の活性化に向けた地理学的アプローチの可能性」『ふびと』第70巻、7-20頁。
- 22) 紀北町(2015):「紀北町合併10周年記念誌 紀北町の軌跡—まちの誇りを未来へ—」紀北町合併10周年誌編集委員会。
- 23) 紀北町「紀北町第1次総合計画」<https://www.town.mie-kihoku.lg.jp/gyosei/oshirase/3/8/1279.html> (2021年8月21日閲覧)
- 24) 入館受付は営業終了時刻の1時間前(20時)となっている。
- 25) 聞き取り調査の結果に基づく。

湯治場の共同性とその再構成に関する社会学的考察 ——肘折温泉郷を事例として——

A Study on Reconstitution of Community-Relationship around Hot Springs
Cure Resort from the Sociological Viewpoint
—A Case of Hijiori Hot Springs Area—

永岡圭介*
Keisuke NAGAOKA

キーワード：湯治場 (hot spring cure resort) ・肘折温泉郷 (Hijiori hot springs) ・
共同性 (community-relationship) ・関係人口 (related population)

1 はじめに

わが国の湯治場の多くは、社交の場を形成してきた。湯治客は互いに地方の話題をたずさえてきては交換する¹⁾。寒湯治などの滞在中、「お互いに餅や煮物の贈答をしたり、客人だか家人だか判らぬほどに炉邊で親しんだものである²⁾」というように、「客人と家人(主人)」とのあいだにおいても、和気藹々と交流し親睦を深めた。地元の農家が日々温泉を利用する一方で、7-8月頃を中心に忙しい湯宿を手伝うという湯村温泉(兵庫県美方郡新温泉町)の例は、湯治場の聖なる伝統を映し出す³⁾。また、リウマチに苦しみ、日景温泉(秋田県大館市)に湯治に来ていた客が、治ったらウチで働いてくれと主人にいわれ、本当に治るものなら一生ここで働くと決心したというように、客人から主人へ転身する例もある⁴⁾。

湯治場の社交性は、都市と農村、山の民と海の民を結ぶうえでも機能する。三斗小屋温泉(栃木県那須塩原市)は、茨城県那珂湊の漁師が端境期や休漁中に疲労回復のために1950-60年代に訪ねた湯治場である。那珂湊商店街の製氷商店が三斗小屋の湯宿の案内所を設けたことを発端に、漁師に同伴した船大工が内風呂の浴槽の修繕に一役買って出たこ

と、山の幸と海の幸の交換など些細な縁が広がり、まるで姉妹都市のような交流に及ぶ⁵⁾。

江戸時代前期以降、わが国の温泉地は、共同浴場を中心に湯宿や民家から成る温泉集落を形成し、「地元住民と湯治客との共同体の意識によって、湯治場のかたちで発展した」⁶⁾。しかし、「客人と家人(主人)・温泉地住民との間の社交性」から「地元住民と湯治客との共同体の意識」はいかにして形成されるものなのだろうか。社交性はいかにして共同性を導くのだろうか。

湯治とは、源泉の湯を浴びることによって、からだの疲れ、ストレス、病を和らげ治し、健康を取り戻し、滋養強化を図る行為であり習慣である。そのために源泉、浴場、湯宿、温泉街から成る湯治場が必要とされ機能する。西川義方(1937)によると、湯治場は農漁民の健康保養と民衆の娯楽の場所として機能し、庶民生活に慶福と光明を与えてきた。そして、湯治は「医師といはず、為政者といはず、苟くも社会学に直接間接するものと牢記して、その啓蒙保存に努めねばならぬ大事である」⁷⁾、と。もっともここで西川が想定する「社会学」の対象は、政治経済、文化、地域など様々な領域の複合的事象であろう。

社交性は一過的な出会いから持続的な交流

*明治学院大学大学院博士後期課程 (Meijigakuin University Graduate Student)

までを含む。このうち持続的な交流や再訪が湯治場という地域としての共同性を構成する。これを仮説として本稿は、湯治場について、その変容過程を踏まえ、社交性がいかんにして共同性を導き再構成するのかを先行知見と調査事例をもとに明らかにし、社会的に考察する。湯治場の過疎化と滞在客数・宿泊日数の減少への対応が課題とされるなかで、湯治場の地域としての共同性を再考すること、これが本稿の目的である。次章以降、まず先行研究・知見の振り返り、事例としての肘折温泉郷の調査の報告、分析、考察を踏まえ、さいごに現代の湯治場の共同性に関する社会的含意を提示する。

2 湯治場の共同性に関する先行研究・知見

本章では、湯治場に関する先行研究・知見を、療養と健康、温泉権と共同湯、ツーリズムの分野にわたって振り返り、各々について共同性の概念を見出す。

(1) 療養と保養の共存

19世紀末に、ドイツの医師ベルツ(1880)が来日し、わが国の温泉地を視察し、湯浴の仕方や過ごし方、湯宿や周辺環境の整備・改良や注意点を『日本鉱泉論』にまとめた。ベルツは、温泉地の風土に熟知し、温泉と浴客を媒介する医師の役割を重視した。また、医師とは別に、気候の変化を観測し、道路の改良などの温泉地の繁盛と衛生確保に向けた管理を担う「管理員(温泉委員)」の必要性が説かれる。そのなかで、療養客の安静を妨げずに、浴客が適度に運動と休憩できるよう遊歩場を確保することが急務とされている⁸⁾。療養客と保養客がともに憩える温泉地を整備していくことが最終的な目的とされていたのである。

20世紀以降、衛生面の改良政策や温泉地の観光地化が進み、内湯を設けた旅館は高級化を図り、集客を拡げた。交通網の発達と整備は、入湯圏を拡大し、遊山と観光を兼ねた温泉旅行を促進した⁹⁾。温泉の効力と湯治の

習慣を農村漁民の骨休めにとどめず、都市生活の喧騒や労働生活からの解放と保養に向けて浸透させることが、国民保健や体位向上の見地から必要視されたのである¹⁰⁾。

他方で、同じ見地から、遊興・観光客の増加によって療養客が排除され¹¹⁾、地元や周辺農村漁民の湯治場が奪われ、静けさや適度な賑いが損なわれていくことが危惧されていた¹²⁾。疲労回復、保養と治療は異なるものとして、同じ温泉地に快復泉と療養泉に、あるいは快復区と療養区に分けることも一考に値すると提言された¹³⁾。西川義方(1937)は、浅虫や花巻、飯坂温泉を例に、湯治客と遊興客が宿泊・入浴する場所を分け、各人の経済力に応じて自炊と賄い、部屋を選択できるよう工夫し、遊興・観光客に占拠されないよう懇願している¹⁴⁾。また、均質的な旅館の乱立と集合は、共同浴場や温泉街、広小路などの情緒的空間を奪い、殺風景に変貌させる¹⁵⁾。ここでの「情緒」とは、都市生活者が求める自然と風情であり、都市的で人工的な属性ではない。だからこそ温泉街の景観を保護し整備する必要がある¹⁶⁾。

江戸期の湯浴と湯治は、経験則や伝承にもとづく漢方医学的な民間療法であり慣習であった。温泉は、湯自体のみならず異なる気候と地形をもつ土地への転地により、からだの土台を改造し強壯にするゆえに、医薬ではなく万能薬であり、病気に対してではなく病人に対して効くものとされる¹⁷⁾。人間の病気対処と健康希求について、湯自体が及ぼす化学的・薬理的作用よりも、温泉の環境をも含めた総合的な刺激が生体リズムを調整し、本来もっている自然治療力が強化されるという見地が再認識される¹⁸⁾。

今日では、湯治は代替医療のひとつとして位置づけられる。生体医療(medical)が健康と病気を分けるのに対し、心身一元的に善良な状態に向けて肯定的快樂(hedonic wellbeing)はそれを代替し補完する。C.Voigt(2014)は、稀少かつ持続的な資源活用と、訪

問客と住民への健康賦活をめざすdestination（滞在のための目的地）へのウェルネスツーリズムを提唱する。しかし、生体医療と代替医療は併存するにとどまり、それらの協働や統合的な実践は未だ例を見ない¹⁹⁾。

医療と健康の観点における湯治場の共同性とは、療養と保養の共存であり、そして湯治が転地と逗留から成る点において、その滞在地での訪問客と住人共々の健康賦活につながる。

(2) 共同湯と温泉権

わが国の温泉は、源泉に近い住民によって利用され、それは共同湯、共同浴場として所有され管理されるのが一般的であった。温泉は私有化されずに入会のかたちをとっていたところも少なくない。しかし、共同湯は公衆浴場のように不特定多数の人々が利用できる様式もあれば、源泉の所有権が共同所有、すなわち総有の場合もある。野沢温泉で受け継がれてきた自主的な湯の管理組織「湯仲間」、明治以降の官有地編入に対抗して成立した「野沢組」について、石川理夫（2010）は、共同祭祀なども含めた共同体的な結束と複数の所有主体相互の拘束を意味づけている²⁰⁾。

温泉の所有権の名義化が進み、大正期以降、「内湯」が増え、それまでの共同湯は「外湯」として分けられてきた。内湯を設置するためのあらたな掘削は、湯量、泉質、湯温を損ない、井戸干渉や枯渇を招きかねない。また、浴客が増え始めるに伴い、外湯を不特定多数の浴客に開放するとともに、地元住民の利用機会を守ることが必要とされる。こうしてわが国の温泉地は、共同湯と共同規制を基礎にしなが、内湯は拡大を図ってきた。

城崎温泉では、地元湯島区による共同湯（財産区）が20世紀初頭から内湯設置をめぐる訴訟し控訴してきたが、戦後まもなく内湯の相続人が湯島区に温泉権を放棄し、調停が成立した。この経緯に対して、川島武宜（1958）は、旧来の慣習法による共同体の暗黙の規制が強固に作用し、内湯を一定の範囲

で許容してきたと考察している²¹⁾。湯島区が将来内湯を設置することを見据えていたことから、この調停は「内湯設置」という区と相続人双方の意図の一致である。共同規制は地元も外部も拘束するが、内湯設置によって温泉権を部分的に外部に開放し、外部の参入を許容する。もっとも箱根や熱海のような観光温泉地は、地付層の世帯の転出に伴い、流入者（新規参入・開業）に温泉権を譲渡し、都市部などの入湯・観光客を引き寄せたとされる²²⁾。

温泉は、地元住民が日常生活に利用するという使用価値とは別に、外部の不特定多数の浴客による入浴料、その他付随する宿泊、飲食、土産物購入による収益といった反対給付的な交換価値をもつ資源となる。「温泉のほとんどは、村民のための使用価値だけで成り立つものではないから、温泉そのものが村のものとして、いわゆる所有、厳密には総有するところであっても、あるいは、それゆえにこそ、温泉を村外の者に利用させることができるわけである」²³⁾。温泉は住民の公益を確保するのみならず、資源の有効な活用によって温泉地とその周辺地域が潤い活性化されることに重きが置かれる。温泉資源の保護と活用は、それを適度に利用し、そこから恩恵を受けることと相即である。

温泉権の観点における湯治場の共同性とは、源泉を利用、管理、総有するという慣習法にもとづく土着の地縁共同体によって構成され、不特定多数の浴客を対象とする共同湯と内湯との共存による温泉街、温泉地域としてのまとまりを示唆する。

(3) ツーリズムと湯治

温泉地は集落の入会と共同湯を基礎にヒンターランド（後背地域）の変化に応じて発達してきた一方で、観光温泉地の発達は、伝統的な長期滞在型の療養・保養を希薄にしてきた。温泉地へ「移動（転地）」する点から、湯治という温泉利用は、ツーリズムの文脈で模索されている。19世紀末より観光温泉地化

した別府温泉郷では、バス遊覧方式で観光地住民が車窓から眺め観られる対象として演出するよう関与する。車窓にガイド(弁士)の案内が加わり、この「物語が消費対象としてのパノラマのイメージ空間へと温泉地を再編成していった」²⁴⁾。交通の発達が入湯圏を拡大したが、その反面において、物語という虚構性が相俟って、湯治場の住民と観光客との互酬性や場所性を剥奪したのである。北條浩(2000)は、観光はたんに「移動(運ぶ、赴く)」ことに重点はなく、湯治が消滅ではなく変容してきたことを強調する²⁵⁾。今日では、湯治の療養と観光、保養という境界はあいまい化し、温泉地の類型に過ぎない²⁶⁾。

ところで、わが国戦後の高度経済成長下で、温泉地はすべて観光地化してきたわけではない。湯治場から「観光地化への対応が遅れた温泉地」²⁷⁾がある。その特性は、立地的に東北や甲信越、中九州の高地や僻地に多く、利用は夏季か夏と秋の二季型で、年間宿泊1-5万、せいぜい10万人である。山村順次(1977)は、1970年代後半の鳴子温泉郷を例に、東京など他県居住地からの観光客の増加に対し、県内郡部からの自炊型湯治客のローカル化を捉え、湯治地区と観光地区への分化・再編を考察した。農業の機械化と農家の兼業化に伴い、まとまった休みがとりにくくなり、湯治が短期化し、レジャー化したという背景が指摘されている²⁸⁾。

温泉地は、観光地化が進むにつれて農村部から都市、大都市への結合が強化される。観光温泉地は避暑や紅葉狩り、スキーなど季節的な遊山と連動して入湯客が増える向きにあるのに対し、保養型温泉地(湯治場)は県内とその周辺地域からの入湯客が年間おとして一定の割合を占める。これを受けて山村は以下のように捉える。山間部など局所的な保養型温泉地では、農閑期の湯治を可能にする温泉資源が見直され²⁹⁾、「観光地化する必要は全くない」³⁰⁾。また、50代以上の高齢層の自炊湯治客の増加傾向から、「都市に居住する

高齢層の憩いの場としても利用できる保養温泉集落の形成が望まれる」³¹⁾。そして、温泉街は外観(景観)整備のみならず、「地域住民と入湯客とが心から触れ合える空間の創出」³²⁾に意義があると指摘される。それでは、温泉地住民と入湯客との「触れ合い」とはいかなるものか。

湯治は旅行と行事という非日常性をもった慣習として根づいてきた。内田彩(2011)は、江戸期に温泉地にて情報源として流通したとみられる旅日記・紀行をもとに、近世以降の広域的な湯治と長期滞在に着目し、温泉旅行を分析した。同行者や湯治見舞いなど見知らぬ者どうし、新参古参は、自ずと迎え、迎えられる、出会いと別れというように互いに役割が変化した。湯治場は社交の空間と時間というコミュニティであった。長期滞在は、一点滞的な「廻り」や郷内での交流から、やがて遊山、立寄り湯や温泉「巡り」へと発展し、観光の要素を帯びてきたのである。湯治は、旅行(移動)としてみた場合は非日常であるが、別の場所へ転地、逗留(滞在)する点では「異日常」の体験であり慣習である³³⁾。

1980年代以降、社会の総観光地化が進むなかで、異日常性を踏まえた地方の観光の発見が注目されるようになる。これは、土地の共同体の自然が離床し、人工的に虚構化、均質化された観光市場と商業主義への反動である。観光地はすべてを市場化し得ない。市場の外側である住民、生活を制御し尽した市場化は、既に市場も外側もなくなっている。これに対し、生活臭や生身の出会い、感動とともに、観光客と住民が互いに他者として変容できる可能性を保持することが必要とされる。また、市場化された他者性を市場の外に出して、土地に再埋め込み化することが必要とされる。一方的な観光「サービス」に依らず、観光「運動」を経て、虚構性を帯びつつ再帰的な観光地化が望まれているのである³⁴⁾。

ツーリズムの観点における湯治場の共同性とは、移動と滞在のなかで、見知らぬ湯治

客・観光客どうしあるいは現地住民との交流を導く異日常的な時間と空間を示唆する。

3 現代の湯治場——肘折温泉郷の事例

本章では、肘折温泉郷の調査事例をもとに、客層の変容と現代の湯治場について所感を交えつつ報告する。

(1) 調査地の概要

肘折温泉郷は、山形県のほぼ中央部にあたる最上郡大蔵村の山あい位置し、開湯約1200年にのぼる古湯の湯治場である。新庄市から南西約30kmの方向にあり、JR新庄駅からの村営バスの所要は約50分である。銅山川に沿って広がる温泉街は、21軒の旅館と他商店から成り、朝市が冬場を除いて毎日開かれている。豪雪地であり、2-3月の積雪は4mにも及ぶ。温泉郷が位置する肘折地区の人口は243人、世帯数は92戸、これらの規模は大蔵村全体の約1割に相当し(2022年1月1日時点住民基本台帳による)、高齢化と過疎化が緩やかに進んでいる。

宿泊客は年間約43,000人(延べ宿泊数では約70,000人泊、2017年9月客層集計による)であり、主に県内の農家の保養としての利用や、宮城県や関東圏からの訪問客が多くを占める。さなぶり(田植えの後の骨休み)の6-7月、きのこ紅葉の10-11月が湯治の主なシーズンである。この他、毎年7月14日恒例の開湯祭や村の春祭は、地元住民と訪問客が一同となった賑わいを見せる。

(2) 調査の経緯と方法

現地の旅館や住民は、湯治場を観光温泉地とはいかに別様のものとして保持し新たに展開しようとしているのか。湯治客と住民のつながり、現代の湯治場を共同性の観点で考えるうえで、筆者は現代の湯治場の事例としての代表性を示すものとして、当温泉郷を選定し調査してきた。

本章は、主に2014年から2016年にかけて筆者が行った聞き取りと視察によるとともに、旅館組合による客層調査集計データ、村

史や温泉史誌、映像資料を参照する。インフォーマントには、湯治客や温泉街の昨今の変容、滞在中の過ごし方に関して尋ねることをあらかじめ伝えたくうえで、自由なかたちでお話を聞かせていただいた³⁵⁾。

当温泉郷の位置する肘折地区では、人口減少に伴い2009年に肘折小学校が大蔵小学校に統合される。ドキュメンタリー映像『湯の里ひじおり——学校のある最後の1年』は、閉校を前にした現地の青年達の結束や児童達の気持ちを捉え、湯治客と住民とのつながりを訴えかける³⁶⁾。源泉を守り温泉街を継承し湯治客を迎えることと、地域社会と住民の生業・生活を維持することと密接であることが焦点化される。

(3) 保養温泉地としての取り組み

当温泉郷は、1989年に環境庁(現・環境省)より国民保養温泉地に指定され、県外からの来湯客が増加した。同年、現地では荒川光昭大蔵村診療所長から温泉を利用した治療や健康づくり、過ごし方について対面にて無料でアドバイスを受けることができる「温泉療養相談」が始まり、県のモデル事業となった。これは現在も日帰り場「肘折いでゆ館」にて6・7・9・10月の隔週土曜または日曜日に開かれている。

国民保養温泉地による計画・整備、温泉療養相談とは別に、近年では「現代湯治、新・湯治」に向けて「スパリエ」の取り組みが推進されている。これは適切かつ安全な入浴について一定の知識と技能を体得すると付与される資格であり、温泉利用客(ファン、リピーター)の拡充をも狙う。2000年7月14日、山形県最上地方の4つの温泉地(赤倉、瀬見、草薙、肘折)が日本スパリエ協会を設立した。肘折温泉郷は2007年よりその育成を始め、その後10年間で、スパリエ(温泉通)は198名、スパリエ・マスター(温泉の達人)は29名、スパリエ・インストラクター(温泉の指南役)は188名に及ぶ。

「温泉療養相談」の対象は療養と保養が共

存しているのに対し、「スパリエ」は温泉利用者と地元事業者・住民が同じ目的に向かって営む点において共同性が見出せる。

(4) 共同湯と温泉街に根づく秩序

現在、共同湯は温泉街の中心部にあたる開湯の湯「上の湯」の他、地元住民が日常利用する「仙氣湯」、「元河原湯」から成る。また、温泉街から北東へ約100m離れた地に、共同浴場や飲食・土産物販売、休憩所、多目的ホールを兼ね備えた日帰り湯「肘折いでゆ館」が、同じく西方に約1.5km離れた地に日帰り湯「カルデラ温泉館（黄金温泉）」がある。また、南方の山裾に佇む露天風呂石抱温泉を含めて、これらが温泉郷を形成している。

修験道と月山信仰が最盛期であった元文年間（1736-41年）、湯の創設・権利者26人（本戸数36軒）によって源泉が共同管理されていた。これが「肘折三十六人衆」という契約講のかたちで根つき、源泉の権利を掌中にするとともに内外ともに乱開発（源泉の掘削、外部資本の参入）から温泉を保護する機能を果たしてきた。契約講とは、外敵の武力から村を自衛し、田畑の水利確保や共有林、道路の整備、祭事、冠婚葬祭などの互助を担い、それらを厳格な規則・処罰等にもとづいて協議し制定する組織である。

当契約講は温泉の権利と管理という目的に沿って限られた旧家のみで構成されてきたが、明治期に入り、この温泉契約とは別に旧家の二・三男や外来者で契約講が結成された。大蔵村では契約講についての古来の記録が連綿と残り、厳格な旧習が守られてきた³⁷⁾。現在、過疎化に伴い講員の減少や存続の危機、講のまとまりの希薄化が問題となっている。「子どもが肘折を出たり、家業を継がなかったりすれば、温泉を使える人が限られるため温泉地全体が衰退する可能性がある」³⁸⁾。

ところで、肘折温泉郷では、旅館に売店を置いていない。「旅館は客室、商店は売店、温泉街は廊下」というように、温泉街全体がひとつの旅館のようになり回遊性と風情を保

っている。温泉街の中央部と周辺部とで客の入り方が不均一であり、湯の共同管理・村普請といった公平性を維持するため、明治28（1896）年に「肘折温泉村則」が定められた。この規則が現在でも暗黙の了解として根づいているという³⁹⁾。この温泉街のあり方は、大正5（1916）年より「肘折市場規程」に則って恒例化し、温泉街で開かれる朝市にも通ずる⁴⁰⁾。

朝市では主に、土地の野菜や山菜、それらの加工品（漬物など）を並べる。旅館の賄い（湯治食）に山菜などを調理し添えること（半自炊）が可能である。商店ではこうした食材のほか、滞在中に食べる菓子や肴、そして宿泊に必要な日用消耗品などを並べる。ただし、朝市に合わせて開く商店は夕方6時に閉める。高齢客が多いこともあり、一部の旅館は滞在中に必要な消耗品や菓子を必要最低限に絞って置き、外へ歩いて買いに行く手間・不便を解消している。このように、温泉街は、滞在客の休養を妨げずに滞在中の必要を充足しつつ、適度に回遊できる環境を保持している⁴¹⁾。

(5) 客層の変容と着地型観光

当温泉郷の平均宿泊日数は、1.67泊である（旅館組合の2016年宿泊客層調査による）。一回の来訪に対する延べ泊数は1泊から2泊が大半で、とくに1泊の割合が拡がり、滞在期間が短期化している⁴²⁾。かつてのように農家どうしあるいは家族ぐるみの湯治に比べて、家族の一部や友人どうし、一人での利用も増えてきている。兼業農家の家族は、作業に出ているあいだの孫の守りなどの必要が生じ、まとまった日数の滞在が実現されにくい。また、相部屋（寄居）もプライバシー観の高まりなどから少なくなっている。

客層は滞在日数と入湯圏の変容とのかかわりにて捉えられる⁴³⁾。延べ泊数では、県内客（その多くは村山地区）が県外客よりも6%程度高いが、実人数では、県外客が県内客よりも12%程度高い。一人あたりの平均宿泊

日数では、県内客が一人あたり2泊以上する客が大半であるのに対し、県外客は1泊する客が大半である。県外客の入湯圏は、過去12年間において、宮城県と東京都の割合が4割程度を占め、近年では東京都他関東圏が拡がりつつある。そして、一人あたりの平均宿泊日数でみた場合、近年は東京都のほうがわずかながら宮城県を上回る。入湯圏が遠いほど滞在が短いとも限らないようである。

現地の観光協会では、通りすがりの宿泊と入浴という1泊2日型ではなく、2泊以上していかにお過ごせるかが課題であり、中長期滞在(着地)型観光を企図しているという。温泉街散策、外湯巡りであれば1泊でも十分可能だが、2泊すると中一日のあいだに山菜採りや川釣りなどのアクティビティが可能である。長期滞在は、入浴と宿泊以外の必要と理由が目的となる。近年では、大雪を逆手にとり、降雪量に応じて宿泊料金を割引く「ドカ雪・大雪割」、地元の催し「地面出し」、風物詩「雪回廊」、村の春祭のシンボルでもある巨大雪だるま「おおくら君」など雪をテーマにした催しが集客に活かされている。また、再訪客への歓待と再訪客どうしの交流を図るために、2012年に「湯の里ひじおり倶楽部」が創設された⁴⁴⁾。会員は1273名である(2021年3月現在)。春祭に合わせて「会員の集い(懇親会)」が開催される。

昨今の滞在目的は療養でもなく娯楽・遊山に徹した観光でもなく、「保養」にあると旅館は捉えている。「小さい頃、お母さんお父さんが日中仕事で空いている時間が無いので、肘折に泊りに来たお客さんに金山のぼた

山とかに連れて行ってもらったり一緒に歩いたり育ててもらったという面もちょっとあったので、単純に1泊2日の観光客のための観光地にするのは、肘折はもったいない⁴⁵⁾。旅館の後継ぎをする青年は、客とのつきあいで育てられ幼少期を振り返りつつ、これからも「遠い親戚が来たみたいないな感じで」再訪客を迎えたいと語る。また、これと関連して、再訪客のなかには、「若い人々がUターンし活躍している様子や、小さなお子様の成長ぶりを見るのが楽しみ⁴⁶⁾」という声があり、通りすがりの観光客との違いを示唆する。

(6)湯治場の継承・持続性

若手層のUターンは、「旅館」を継ぐというよりも、「家」を継ぐという気持ちが先にあり、ひいては温泉、肘折温泉郷という地域を継ぐということにつながる。「われわれは家を守るという必要があって帰ってきたけれども、その必要がない若い世代には肘折に住む特別な理由がない。ここに戻ってくる理由が今後はもっと希薄になっていくでしょう。肘折に住む理由を自分の中できちんと整理して、こうしたいんだ、というものが無いと子どもたちを引っ張っていけないし、いい所だっただけで植え付けてやれません(傍点部は筆者)」⁴⁷⁾。

ここでは、肘折温泉郷という地域を継承する次世代の担い手と湯治客とのつながりが肝要となる。このなかで、現地の旅館や商店の現役の主人たちは、「この肘折温泉という集落が社会のなかで必要だという認識をもつこと」や「一度出た若い人たちが肘折にいずれは戻ってこなければという気持ちが弱くなるのが心配」、「こうして続けられて息子が続け

表1 肘折温泉郷の居住地別客層構成

集計項目	居住地	居住地				海外	
		全体	県内客	県外客	宮城県		東京都
宿泊実人数		39,385	17,398	21,890	5,444	4,543	97
延べ泊数		65,948	34,951	30,883	6,882	7,329	114
平均宿泊日数		1.67	2.01	1.41	1.26	1.61	1.18

(注) 2016年肘折温泉旅館組合客層調査集計より筆者作成。

てくれるのは嬉しいけれども息子の代でやっていけるかが不安」と、次世代への継承と持続について危惧する⁴⁸⁾。他方、現地の若手層は、自分たちが幼い頃から湯治客とともに生活し成長してきたことをもとに、湯治客あつての肘折という地域と生活であることを認識している。

「人口が減っているとはいえ、若い人がここ最近に戻ってきます」⁴⁹⁾。筆者が聞き取りをした13名のうち7名は、進学に伴って村外に出郷し、卒業後は空港や宿泊関連の接客サービス、SEなどの就労を経て、20-30代のうちに帰郷している。帰郷して定住する以外に、繁忙期の手伝い、夜市や開湯祭などの催事に一時帰郷して活躍している姿も目にすることができる。また別の旅館でも、「なかには疲れて帰ってきているのもいますけど。子供の数は案外多いんですよ。あれ見てください、あれだけここには子供がいるんですよ」⁵⁰⁾と玄関口の壁に貼ってある肘折の夏の風物詩「ひじおりの灯」のチラシ(図)を指しながら言い、高齢化・過疎化の危惧をさほど示さない。

担い手や後継者の確保は、個々の事業者、とりわけ主人にとって切実な問題であるとはいえ、若手層が先ず後継する対象は、家や家業である前に、温泉街の催事などをはじめとする肘折という地域である。個々の旅館の湯治客は、肘折全体の湯治客である。



図 「ひじおりの灯」チラシ
(注) 現地にて入手。

4 分析と考察

本章では、肘折温泉郷の事例に対して、先行研究と初発の問題意識に沿って分析し考察する。なお、湯治客層の変容について、滞在の「小口化」と入湯圏の外延化の観点から既出の拙稿で考察しているため⁵¹⁾、本稿ではまずその骨子を述べ、関係人口の観点を加えて更なる考察につなげていきたい。

1960年代前半から農家の兼業化、農業の機械化が進み、生活様式が個人化するなかで、湯治行きは農事暦に沿った年間行事的な慣習性を希薄にしてきた。1970年代後半から、宿泊は、農閑期の農家の長期滞在から、徐々に都市部居住者の1泊2日型にシフトする。滞在期間が短期化し、老人クラブなどの団体客が減り、温泉利用が「こまぎれになる」傾向、これが「小口化」である。入湯圏の産業構造の変容と労働・生活様式の多様化、個人化が、湯治の小口化を促した。この傾向に沿い、入湯圏が宮城や関東をはじめ都市部や遠隔地に拡がる傾向が「外延化」である。本稿第2章でも触れたとおり、これは交通の整備・発達によるアクセスの至便化に伴う。

しかし、湯治場の変容は、温泉利用の小口化と入湯圏の外延化によって示唆されるものの、湯治それ自体の衰退ではない。県内で農家を営む常連湯治客の語りによれば、肘折は観光ではなく湯治として訪ねるという⁵²⁾。元来、療養としての湯治は長期滞在をして効果をみるとはいえ、たとえ短期滞在でも再訪を重ねる場合、目的は観光よりも湯治である。再訪を重ねる客は、懐かしさを運び、いっそう湯治場とのつながりを高めるであろう。また、肘折の場合、もとより東京からの入湯率が他の県内温泉地に比べて高く⁵³⁾、入湯圏の外延化は同心円状に進む傾向としては捉え難い。この傾向は、むしろ周辺地域よりもさらに遠い入湯圏と湯治場を結びつける可能性をもつと考えられる。

わが国の湯治場の多くは、周辺の農山村地域から都市部へと入湯圏を拡げ、現地住民と

の交流によって形成され、現地住民の生活や人口と密接に変容してきた。農業の機械化、農家の兼業化が進み、農村は都市化してきた。その反面で、農村は過疎化し、後背地を減少させ、都市の過密を進めた結果、都市と農村の差異が希薄化（半農半都市化）してきた。極度な農村と都市の分化は、異常・危機的なものと捉えられる。この社会学的一説には、農村の健康と活力を都市生活・労働者に寄与し、都市から農村への人口の反対流（turn）が見出され、農村と都市の交流を示唆する⁵⁴。ただし、ここにはその交流の持続性と展開、「関係人口」は予見され得ない⁵⁵。

肘折温泉郷は、これまで人口減少と過疎化への対策として、家業や地域の後継者、つまり生産年齢人口の確保・育成に注力してきた。しかし、たんに転出をくい止めて転入を増やすことが至上の対策ではない。また、Uターンや後継は確実性がない。肘折地区にとつての周辺外部は、村や県内にとどまらず、湯治客が居住する宮城県や東京都などの入湯圏である。湯治客の再訪、湯治客への誘い、現地住民と湯治客との交流によって肘折という温泉集落は成り立っている。これは、次世代の現地住民と湯治客のために源泉と温泉街を守らねばならないという現地の人々の意識・想いととも、再訪する湯治客が現地の人々と温泉、地域を気にかけて発展と無事、再会を希うところに表れる。

若い世代は、卒業・進学・就職に伴って肘折から離れるけれども、主に都市部での生活・就労を経験し再び肘折に戻ってくる。それが都市部からの湯治客を誘い迎える意識、「また来てみたい、何度でも訪ねたい」という湯治客の再訪動機と懐郷意識へとつながるのであろう。この点において、源泉を守り、湯治客を代々末永く迎えることが、温泉集落全体で生活・生業の場を確保し後継していくという「必要」につながる。そして、肘折はかつてより寛ぎをもって過ごせる遠く離れた（鄙びた）湯治場であると同時に、都市部の

生活・労働者の入湯圏と結びつく都市化した（開けた）地域でもある。

旅館や商店を後継する若者が幼少の頃を振り返る場面と、再訪客が現地の子供達の成長や活躍、人々の健気さをみて温泉の恵みに感謝する姿を合わせると、ここに住む人々と訪ねる客との「共同性」が掴める。これは開湯祭に見られる、住民と湯治客が「ひとつになって」神輿の周りで数珠回しをする場面にも象徴化されている⁵⁶。互いの親近感、身内とは異なるもうひとつの親戚のようなつきあいを形成する。この点から、再訪する湯治客は、現地に同質化するように慣れ親しみ、地元の人々との見分けがつかなくなる。これは、定住民でも通りすがりの旅行者でもなく、移動を前提としつつも「景観のなかに一時的に居住する観光客」⁵⁷であり、社交・親交を通じて共同性を導く「関係人口」に相応する。

近年、観光開発・振興が地方創生の一環として注目される。そのなかで、外発・外来の資本による観光開発や企業誘致は、地方を創生し賦活する傍らで、地域に内在する固有の慣習や規模、温泉や降積雪など厳しい自然条件、極度に余剰な資源をもつ環境に見合わないことも少なくない。温泉の場合、共同浴場と湯の共同管理・所有と、これらの担い手である地縁組織や地元事業者が過剰な掘削と内湯化を抑制し、外部資本と馴染まず折り合いがつかない場合がある。その結果として、創生に及ばず消滅を招きかねないことが懸念さ



写真 開湯祭での数珠回し
(注) 撮影2014年7月14日、現地にて依頼。

れる。

肘折の場合、内湯は早くから定着し、温泉契約（契約講）がそれを支えることにより、外部資本による開発を抑止してきた。そのうえで、旅館や商店など温泉街の生業と生活における秩序が自ずと浸透し受け継がれてきたのである。人口減少や高齢化はその地域を縮小させる半面、現地住民の若手層は外部地域にかかわりUターンし、都市部から入湯客が交流し再訪客が往還する。この地域社会構造が内発的な地方創生につながる可能性を秘めている。これにより、現代の湯治場は、極度に鄙び衰退するわけでもなく、喧噪感や自然環境・慣習の破壊・消滅を招くわけでもなく、適度に地域社会の構造を保つのである。

5 結語

湯治場における社交性は、一過的ではなく世代や地域を超えて継承される。「湯治客と地元住民、客人と家人（主人）」は、湯を中心とする「居住」の空間・時間を互いに異なる立場で過ごす。しかし、湯治場は「再び戻って過ごす場所として」共有される点において同質化し、ここに「共同性」を再構成する。これに対して、外発的で過剰に観光地化された温泉地では、観光客、湯治客、地元住民が各々湯の恵みを受けられるよう棲み分けされる。これは異質な存在を互いに尊重するものの、共生（共存）にとどまり、交流の持続性や親密性に乏しい。契約講や共同湯、温泉街などで構成された土着の地縁的共同性は、外来者に対して排他的ではなく、迎え入れる余地を開いている点において見直される。湯治場の共同性は、不特定多数が湯を享受することをもとに、それは異質な人々へ開かれていく様態である。

外来者はあくまでも客体としてのみ共同体（Gemeinschaft）に属し、その主体・保持者となるのは容易ではなく、「共楽（Mitgenuss）」⁵⁸が非永続的である点では客としての価値がない、と社会学者テンニエス

（1887）は言う。「しかし客は、畏敬や愛をもって遇せられれば遇せられるほど、客として他人の家に関係している間は、ますます主たる身分に近づき、尊敬される度合が少なければ少ないほど、ますます僕たる身分に似てくる」⁵⁹。子供が将来の大人であると同様に、客人は未来の主人であり、後継者的な立場に近づく。客人は現地の子供と同様に、未完成な存在であり保護され、一時的かつ永続的な奉仕者としてあつかわれる。

テンニエスは、大都市や都市の発展に伴って土着人と外来者の区別（異質性）が問題ではなくなると説く。温泉地域としての湯治場は、帰郷してくる若手層と同様に再訪する湯治客が湯治場の将来の人口（担い手）として迎えられ、共同性（Gemeinschaft）を再構成することも期待される。それは、双方が温泉を適度に利用・管理し、その恩恵を受けていることの裏返しでもある。

謝辞

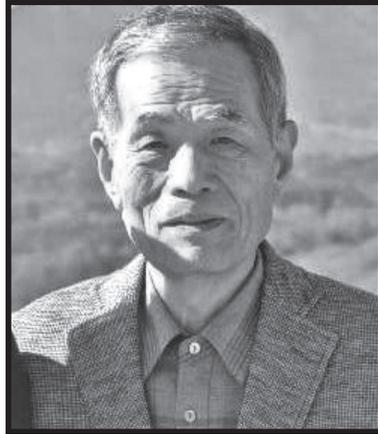
本稿の調査に際して、客層集計結果の提供、および肘折温泉郷に関する筆者からの質問等に対応していただいた大蔵村観光協会会長であり日本温泉地域学会会員である木村裕吉氏に感謝の意を表します。

注・参考文献

- 1) 野口冬人(1991)：『湯治場通い』現代旅行研究社、53頁。
- 2) 西川義方(1937)：『温泉須知』診断と治療社、387頁。
- 3) 日下裕弘(1995)：『日本人の自然遊——湯浴の聖と俗』近代文芸社、133-148頁。
- 4) 渡辺喜恵子(1991)：『湯治場風土記』秋田魁新報社、71-72頁。
- 5) 箕川恒男(2008)：『海の民 秘湯をめざす』茨城新聞社。
- 6) 山村順次(2006)：『温泉——自然と文化』社団法人日本温泉協会、64頁。
- 7) 前掲2)、388頁。
- 8) Bälz, Erwin(1880)：『日本鉱泉論』中央衛生会、21-30頁。

- 9) 関戸明子 (2007) : 『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版、101-108頁。
- 10) 酒井谷平 (1939) : 『温泉・氣候轉地療養』博文館、58-63頁。
- 11) 排除は江戸後期にもみられたという説がある。伊藤克己 (2010) : 「江戸時代の温泉と『癩病』——適応・禁忌と泉質・湯性」『湯治の文化誌』日本温泉文化研究会編、岩田書院、9頁。
- 12) 前掲2)、387、396頁。
- 13) 前掲10)、65-66頁。
- 14) 前掲2)、387-388頁
- 15) 下村彰男 (1993) : 「近代における温泉地空間構造の変遷に関する考察」『造園雑誌』、56(5)、社団法人日本造園学会、241-246頁。
- 16) 布山裕一 (2009) : 『温泉観光の実証的研究』御茶の水書房、27頁。
- 17) 前掲10)、2-4、84頁。この点において、漢方医学的な湯治は、湯の成分を基礎とする西洋医学の見地とは異なる。
- 18) 阿岸祐幸 (2009) : 『温泉と健康』岩波書店、44-45頁。この機能は「総合生体調整作用」と称される。
- 19) Cornelia Voigt, Christof Pforr (2014): *Wellness Tourism: A destination perspective*, London: Routledge, p.36, pp.301-304.
- 20) 石川理夫 (2010) : 「野沢の温泉資源と共同湯を支える地域共同体の意義」『温泉科学』、60、一般社団法人日本温泉科学会、30-51頁。
- 21) 川島武宜 (1958[1994]) : 『温泉権』岩波書店。
- 22) 武田尚子・文貞實 (2010) : 『温泉リゾート・スタディーズ——箱根・熱海の癒し空間とサービスワーク』青弓社、18-19、48-50、180頁。武田によると、箱根・熱海の観光温泉地が伝統的な湯治場型の温泉地形成と対照化されている。
- 23) 北條浩 (2000) : 『温泉の法社会学』御茶の水書房、155頁。
- 24) 須藤廣 (2008) : 『観光化する社会——観光社会学の理論と応用』ナカニシヤ出版、52頁。
- 25) 前掲23)、79-86頁。
- 26) 前掲16)、4、34-35、62頁。
- 27) 山村順次 (1998) : 『日本の温泉地——その発達・現状とあり方』社団法人日本温泉協会、66-67頁。
- 28) 山村順次 (1977) : 「鳴子温泉郷における湯治客の地域的特性」『千葉大学教育学部研究紀要』、第1部 26、千葉大学教育学部、245-256頁。
- 29) 山村順次 (1980) : 「日本温泉観光地の入湯客の地域的・季節的特性」『地理科学』、33、地理科学学会、11頁。
- 30) 前掲27)、67頁。
- 31) 前掲28)、255頁。
- 32) 前掲27)、13頁。
- 33) 内田彩 (2011) : 『近世後期における温泉地への旅と滞在生活に関する研究』立教大学観光学研究科博士学位請求論文、130-131、97-105、165-169、212頁。このなかで、温泉地の滞在(廻りと巡り)における出会いや交流によって律動(メリハリ)を与える「異日常」は、居住地から温泉地へ移動する道中に位置づけられる「非日常」から区別されている。
- 34) 前掲26)、108-109頁。
- 35) 旅館8軒、商店4軒、役場関係者1名に対し、あらかじめ電話にて依頼し、また観光協会関係者2名と湯治客2組は旅館から紹介いただき、いずれも調査内容を匿名で公表することについて了承を得ている。また、宿泊客層調査(2017年9月)は、旅館組合が集計したものであり、観光協会会長の協力のもとで入手している。
- 36) 渡辺智史監督 (2009) : 『湯の里ひじおり——学校のある最後の1年』アムール+パンドラ。閉校を前にした青年達の結束や児童達の気持ち、現地の人達や湯治客の想い・メッセージを交えつつ、肘折に根づく月山修験、湯治場の伝統と温泉街の特徴を捉える76分のドキュメンタリー映像。
- 37) 大蔵村史編纂委員会 (1999) : 『大蔵村史——集落編』大蔵村、247-255頁。
- 38) 山形新聞、2014年4月6日、朝刊。
- 39) 前掲36)、18'00"。
- 40) 肘折歴史研究会による「肘折通信」第二〜三號を参照、および商店Cへの聞き取り(2015年7月12日)。
- 41) 永岡圭介 (2019) : 「保養の創造としての現代の湯治——肘折温泉郷の事例」『現代民俗学研究』第11号、現代民俗学会、80-81頁。
- 42) 片桐進・佐藤和美・荒井富・鈴木康洋 (1991) 「山形県の温泉地における療養客の変遷」『日本温泉気候物理医学会雑誌』第54巻第4号、

- 一般社団法人日本温泉気候物理医学会、221頁。当温泉郷は、1950年と1980年代後半の調べでは、5泊未満の割合が2割から1割へ減少している。
- 43) 永岡圭介(2018):「湯治に訪ね住まう人口と地域——山形県大蔵村肘折温泉郷の事例」『明治学院大学大学院社会学専攻紀要』第41号、明治学院大学大学院、49-51頁。
- 44) 永岡圭介(2020):「温泉地への再訪動機と懐郷についての一考察——山形県肘折温泉郷を事例として」『温泉地域研究』第34号、日本温泉地域学会、33-40頁。
- 45) 前掲38)、27'40"-50"。なお、当温泉郷がただ観光地としてのみならず保養滞在の場所であることについては、開湯祭(2014年7月14日)に寄せられた大蔵村村長の式辞でも言及されている。
- 46) 前掲44)、38頁。「湯の里ひじおり倶楽部」入会のメッセージ記載からの引用。
- 47) 「家族の記憶をたどって:山形県大蔵村肘折温泉の場合——新しい湯治場を目指して肘折温泉 若手経営者座談会」『別冊東北学』vol.2、作品社、東北芸術工科大学東北文化研究センター、74-75頁。
- 48) 前掲36)、23'06"-24'30"、36'10"-36'45"。
- 49) 旅館Vへの聞き取り(2014年7月12日)。
- 50) 旅館Dへの聞き取り(2014年7月14日)。
- 51) 前掲43) 52-3頁。
- 52) 前掲41) 82頁。
- 53) 杉山尚(1958):「山形県の温泉—医学的方面—」『温泉科学』9(2)、日本温泉科学会、38頁。肘折温泉郷は、新幹線や航路が発達する以前から、他の温泉地に比べてとくに東京都からの入湯の割合が高い。
- 54) Sorokin, Pitiri Aleksandrovich, Zimmerman, Carle Clark(1929): *Principles of Rural-Urban Sociology*, American social science series, New York: Henry Holt (=京野正樹訳(1977):『都市と農村——その人口交流』巖南堂書店、334、340、363-365頁)。また、農村をゆかしがる(愛でる)都市のまなざしとその傾向は、人口の都市集中の反動の一面とされる。柳田國男(1929[1991]):『柳田國男全集29』筑摩書房、50-53頁。
- 55) 総務省地域力創造グループ地域自立応援課(2018):『これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会(報告書)——「関係人口」の創出に向けて』、http://www.soumu.go.jp/main_content/000529409.pdf、25-28頁(2022年1月9日閲覧)。田中輝美(2021):『関係人口の社会学——人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会、77頁。
- 56) 近年では、神輿の担ぎ手の一部も一般公募されている。
- 57) Urry, John(2000): *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the Twenty-first century*, London, Routledge (吉原直樹監訳(2006):『社会を超える社会学——移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局、250-256頁)。
- 58) 共に享受するという意味であり、つまり同じ釜の飯を食う間柄を形成する。
- 59) Tönnies, Ferdinand(1887): *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*, Leipzig: Fues. (杉之原寿一訳(1957):『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粹社会学の基本概念』岩波書店、上巻70頁、下巻124頁、202-203頁)。



山村順次先生 (千葉大学名誉教授)

山村順次名誉会長追悼特集に寄せて

石川 理夫 (会長・温泉評論家)

日本温泉地域学会の初代会長で名誉会長の山村順次先生が2021年11月22日に逝去されました。享年81歳でした。

当学会は、山村先生の強い意志と目標、人望、そして学界から温泉分野にわたる幅広い人脈をもとに創立に至りました。山村先生なくして当学会の誕生はなかったと申し上げて、過言ではありません。

山村先生は、当学会が2003年5月11日・12日に草津温泉にて開催した創立大会において初代会長に就任され、3期9年間会長を務められました。その間、会計を含む学会事務局活動全般から年2回の学会誌の編集作業、年2回の研究発表大会の準備、視察会・宿泊の手配まで一手に引き受けてこられました。2012年6月に長野県松代温泉で開催された第19回研究発表大会・総会において会長職を私にバトンタッチされましたが、それまでいかに山村先生が多大な労力と時間をもって献身的に当学会の発展に尽くされてきたか、身をもって実感しています。

山村先生を追悼し、これまでの歩みとご業

績を振り返るために、本号において山村順次先生追悼特集を組むことにいたしました。特集には当学会の名誉会員、理事役員、山村先生から直接指導を受けた会員を中心に追悼文を寄せてもらいました。

ご著書を通じてしか存じ上げなかった山村先生に初めてお会いしたのは、お互い研修会の講師と呼ばれた1991年1月の山形県肘折温泉でした。大雪に加えて湾岸戦争勃発のニュースが飛び込み、早めに終えた後の懇談の機会に山村先生の温厚なお人柄に接しました。そのとき「どうして広く人文社会科学分野から温泉(地)を研究する学会が日本にないのでしょうか」と申し上げた思いを、山村先生もすでに心に秘めておられたようでした。

実に幅広い分野から会員が参加しているのが当学会の特色です。温泉(地)を多様な視点でとらえて多角的に調査研究し、発信していくことが当学会の役割であり、そのことを何より山村先生が願っておられることでしよう。

山村順次先生の経歴と観光地づくりの観念

池永 正人(副会長・長崎国際大学)

1 山村順次先生の経歴

山村順次先生は、1940(昭和15)年10月12日に大分県別府市で誕生した。山村先生が地理に興味を持つようになったのは小・中学生のころであり、将来の職業は高等学校の地理教員を志望していたようである。

1959(昭和34)年に広島大学文学部史学科地理学専攻に進学された山村先生は、地理学の実習科目の「図学演習」や「野外実習」で地域研究の手法を学ばれた。「阿蘇谷の集落地誌的研究」と題する卒業論文には、精緻な現地調査で得た事象が丁寧な地図で表現されている。山村先生は地域事象の地図表現の技法に優れ、研究論文の地図や観光地の案内地図に関しては、職人気質の厳格な眼差しで批評されておられた。

山村先生が温泉地の研究を本格的に始めたのは、東京教育大学(現 筑波大学)大学院理学研究科地理学専攻に進学されてからである。とりわけ、温泉地の形成と機能に関する研究に興味をもたれ、研究指導教員の浅香幸雄教授の観光診断調査に同行して、温泉地の発達史的視点と地域形成者の意図を重視する研究手法を学んだ。地理学以外の温泉研究者との交流も広まり、法社会学者の北条浩教授の温泉権研究に刺激を受けたようである。

学位論文は、日本温泉協会の調査協力を得ながら、修士論文「東京周辺の温泉地における観光産業の形成—特に鬼怒川温泉を例として」、博士論文「温泉観光集落の発達と構造に関する研究—伊香保・鬼怒川・修善寺・伊豆長岡の比較—」を完成させ、1969(昭和44)年に理学博士(東京教育大学)の学位を取得した。

職歴については、1968(昭和43)年に千葉

敬愛短期大学専任講師、翌1969(昭和44)年には大東文化大学経済学部助教授に就任して教鞭を執られた。1974(昭和49)年と翌年の2年間は、文部省初等中等教育局に教科書調査官として勤務された。わずか2年間で教科書調査官を退職した理由は、「地理学の権威ある先生が執筆された教科書原稿に、自分が意見を述べるのが耐えられなかった。」と、私に話してくれたことが思い出される。山村先生の謙虚なお人柄がうかがえる。

そして、山村先生は1976(昭和51)年10月に千葉大学教育学部に助教授として赴任され、1983(昭和51)年には教授に昇任された。その後も同大学大学院教育学研究科(修士課程)および自然科学研究科(博士課程)の教授として教育・研究に従事され、2006(平成18)年3月に30年間勤務した千葉大学を定年退職した。山村順次先生の指導による博士号取得者は13名(日本人6名、中国人3名、韓国人2名、セネガル人1名、パプアニューギニア人1名)におよび、その多くが温泉地・観光地の研究者になっている。

同年4月からは、城西国際大学に新設された安房キャンパス観光学部(千葉県鴨川市)の教授として、2010(平成22)年3月まで4年間勤務された。山村先生の研究内容は、次のように分類される。

- ①湯治場の研究：その成果は日本温泉協会の機関誌『温泉』に多数掲載。
- ②農山村地域の観光開発に関する研究：岐阜県・長野県の中部山岳地域。
- ③リゾートの光と影の研究：福島県会津若松市のスキー場、千葉県鴨川市のゴルフ場の開発など。
- ④外国の温泉地・観光地の研究：ヨーロッパ、

韓国、中国の温泉地、カナダ・ウイスラー、メキシコ・カンクンのリゾート開発など。

これらの研究成果は、著書36編(単著12、共著1、編著4、分担著19)、研究論文約100編、調査報告書110編といったように、膨大な数になる。ここでは分担著を除く著書を以下に示す。

【単著】

1. 『志賀高原観光開発史』徳川林政史研究所、1975年
2. 『日本の温泉地：その発達・現状とあり方』日本温泉協会、1987年
3. 『世界の温泉地：温泉リゾートの発達と現状』大明堂、1990年
4. 『観光地域論：地域形成と環境保全』古今書院、1990年
5. 『草津温泉観光発達史』草津町、1992年
6. 『観光地の形成過程と機能』御茶の水書房、1994年
7. 『新観光地理学』大明堂、1995年
8. 『世界の観光地 1 (アングロアメリカ)』大明堂、1997年
9. 『世界の観光地 2 (ラテンアメリカ・オセアニア)』大明堂、1998年
10. 『新版 日本の温泉地』日本温泉協会、1998年
11. 『世界の温泉地：発達と現状』日本温泉協会、2004年
12. 『47都道府県・温泉百科』丸善出版、2015年

【共著】

13. 『観光地理学』大明堂、1976年(浅香幸と共著)

【編著】

14. 『図説 日本地理：日本列島の地域変容』大明堂、1986年(新訂版、2001年)
15. 『観光地域社会の構築：日本と世界』同文館出版、2006年
16. 『図説 新・日本地理：自然環境と地域変容』原書房、2008年
17. 『観光地理学：観光地域の形成と課題』

同文館出版、2010年(第2版、2012年)

2 観光地づくりの観念

山村先生は、草津温泉の湯畑をはじめ見たとき、「これぞ温泉の原点」と思ったそうである。また、欧米諸国の温泉観光地を視察した際に、日本がいかにか地域の個性をないがしろにした開発を進めてきたかを痛感したと述べておられた。とりわけ、自然や産業、歴史や文化の多様な地域資源を観光活用したカナダのウイスラーの観光地域社会に、強い影響を受けたようである。このことは、山村先生の著書『新観光地理学』(1995年)に反映され、「観光資源という言葉は、観光客を受け入れる観光産業によって、経済的価値を生み出す観光対象物という意味で用いられてきたが、現在では、文化的・教養的意義が強調されて、観光客の側から見た資源的価値も重要視されている。」と記されている。そして、外国の先進観光地の視察経験から、外国研究の必要性を強調されておられた。

「観光はどんちゃん騒ぎすることではない。異質の所に来ればそれが観光、移動して帰ってくること、それも観光」、このような言葉を幾度か聞かされたことが思い出される。

山村順次先生の観光地づくりの観念を整理すると、次のようになる。

持続可能な観光地・温泉地の形成は、地域住民・観光業者・行政が一体化して個性的な地域づくりに取り組むことである。そのためには、地域の宝の観光資源化、地域ガイドによる観光客と地域住民の触れ合いを通じた地域理解の深化が必要である。そして、観光客が温泉地を志向する3つの要素は、「温泉資源・温泉情緒・温泉地の自然環境」であると説いている。この観念は、日本温泉地域学会の活動にも反映されている。温泉に関して多様な価値観をもった会員が、学会開催地で会員相互あるいは地域住民と自由な議論、情報交換をすることで、当地の持続可能な温泉地域づくりに貢献しているものとする。

山村順次先生を偲ぶ

山村順次先生のご逝去を悼む

長島 秀行
(名誉副会長・東京理科大学名誉教授)

山村順次先生は2021年11月22日、病気のため逝去されました。81歳でした。

山村先生とは、およそ20年前、日本温泉科学会大会で初めてお会いし、お話をしていると、先生は東京教育大学(現・筑波大学)大学院理学研究科に在籍しておられたことが分かりました。当時、私も大学院理学研究科に在籍しておりましたが、先生が地理学専攻に対し、私は植物学専攻でしたので、直接お会いすることはありませんでした。

このようなご縁もあり、初めてお会いした時、同じ温泉の研究している立場から、これからも、是非、一緒に研究しましょうという事になりました。しかし、当時の日本温泉科学会は自然科学分野に偏っているので、人文・社会科学分野も含めた新しい学会を設立しようという事になり、多くの賛同者を得て、2003(平成15)年5月に群馬県草津温泉にて日本温泉地域学会の設立総会が開催され、山村先生が会長に選出されました。私も常務理事として学会運営に協力し、現在、日本温泉地域学会は全国から300名以上の多くの会員を得て、毎年、全国の温泉地で大会を開き、年2回、学術誌「温泉地域研究」を発行してまいりました。2008(平成20)年5月には、一般書籍『日本温泉地域資産』が発刊され、全国から125件の温泉地を選定し、自然遺産、文化遺産、複合遺産としての意義が明らかにされました。2019年3月には石川理夫現会長のもとの、『新版・日本温泉地域資産』が発刊され、150件の温泉が選定され、

幸い、好評を得ています。

先生は2012(平成24)年6月には会長を退かれ常務理事に、2018(平成30)年5月には名誉会長になられ、後進の指導にあたってこられました。

その間、先生は千葉大学や城西国際大学の教授としても活躍され、温泉に関する多くの論文の他、「草津温泉観光発達史」(草津町、1992年)、「新版・日本の温泉地」(日本温泉協会、1998年)、「新版・世界の温泉地」(日本温泉協会、2004年)などの著書を発刊され、温泉学の発展のため、多大な貢献をされました。

このように、私共は先生によって、公私にわたり、たいへん大きな影響を受け、温泉研究では懇切なご指導を頂きました。今後、先生の益々のご活躍を願っておりましたが、この度の訃報、誠に残念に思っております。しかし、先生の温泉学へのご業績は、これからも永く後世に伝えられることでしょう。

山村順次 初代温泉地域学会会長を偲ぶ

甘露寺 泰雄
(名誉会員・元中央温泉研究所専務理事)

山村順次先生のご逝去を痛み謹んでお悔やみ申し上げます。

先生と初めてお会いしたのは、千葉大学の教授をされておられた頃で、地理学がご専門であります。早くから温泉の研究、特に温泉地域社会に関する広い分野の研究を指導されておられました。中でも温泉地の発達や観光産業、入浴客の実態、湯治等の調査、研究をてがけられておられました。私は、温泉の資源や施設の経年変化を調査しておりました

関係で、先生から、地域性、つまり地域的な変化の特徴の重要性を教えてください、現在もその仕事を続けております。

先生は、「変化」ではなく、「変容」という言葉をつかわれ、これが、温泉地の特徴を把握する重要なポイントであることを教わりました。

つまり、ただ単なる変化ではなく、「容」かたちの変化、温泉をとりまく社会、環境の変化と関連した、資源や施設の変化を追求することが重要であると云うことを教えてくださいました。

もう一つ、先生と討論した点は、温泉法では、この地域性という観点が、国民保養温泉の地域指定はありますが、例えば「影響」という面ですと、源泉を中心とした問題が主体で、温泉地と温泉地、それを取り巻く環境の問題、つまり温泉の地域性はあまりふれられていない。つまり、温泉法にもっと広がりを加えた地域的な側面を考慮した条項を加える必要性があるのではないかと云った点です。

『温泉地域研究』創刊号で、先生は、この学会は、「温泉地域の科学的実証研究を推進するとともに、その成果を活かして、温泉地域の諸問題の解決に対して前向きに対応する」とありますが、現在本学会の会員総数は300名を超え、今後も更に前進を続ける状況でございます。

先生には長らくご指導を頂き有難うございました。どうか安らかにお眠り下さい。心からご冥福をお祈り申し上げます。

山村順次先生の思い出と功績

前田 勇

(名誉会員・立教大学名誉教授)

1 山村順次先生の思い出

山村順次先生にお目にかかったのは1970年代初めで、わが国に観光に関する学会が誕生して間もない頃でした。山村先生は地理学の分野で活躍しつつおられましたが、小生は

社会心理学・産業心理学といった全く異なる分野を志向していましたのでお話しする機会はあまりありませんでした。しかし、まもなく観光に関わる考え方や意見などを直接伺う機会が急速に増加することになりましたが、その発端は“観光に関する大学レベルの標準的テキストの編纂”に関する議論からでした。

一方において、小生所属の立教大学が日本最初の「観光学科」を設置することに取り組み出したことが密接に関係しています。立教大学は“以前からの関わり”から、戦後間もない時期から、多くの学生に門戸を開いた公開講座として「ホテル講座」を開設していました。東京オリンピック大会(1964年)の開催を契機に、“観光分野を対象として研究・教育を行う学部・学科”の設置を(欧米諸国同様に)日本も本格的に検討する必要があるとの意見と要望が大学内外から増大した結果、立教大学が具体的に検討することになり、社会学部内に準備委員会が設置されました。

このような背景から、大学レベルの観光に関する標準的テキストを早急に編纂・刊行することの必要性がさらに高まり、内容構成と執筆者を選定する委員会がスタートし、小生が事務局的な役割も兼ねることになりました。そして、全17章から構成される第5章「人文観光資源」を山村先生が担当され、全17章から構成されている『現代観光論』が(法学関係書で著名な)有斐閣から1974年に出版されました。

このように、観光に関する書籍が大学専門書の一冊として並べられたことによって、観光も“大学で学ぶ領域の一つ”となることができました。山村先生が担当された章では、人文観光資源についての一般的説明をふまえて、問題点となる事柄の具体的な課題を説明されるとともに、関係する人びとの取り組むべき課題等について平易に具体的に説明しておられたことを記憶しています。今から50年近く前の思い出です。

2 温泉研究の第一人者として多年にわたって大活躍

山村先生は、私大に地理学科教員として勤務された後、「教科書審議官」という文部省所管の要職委員を務められた後、千葉大学教育学部教授に赴任され、多くの学生・研究者の指導・育成に努められました。さらに、2000年代初めには「日本温泉地域学会」が発足して、多様な温泉研究者を育成するとともに、温泉についての興味・関心のさらなる広がりに力を注いでこられました。

山村先生は、観光地理とくに温泉研究の第一人者として活躍され、日本国内ならびに世界の主要な温泉地についての歴史・規模・特徴を簡潔かつ的確に紹介され、温泉地全体の把握と理解に役立つ著作を数多く執筆されました。温泉に関する教育に関して特筆すべきことは、世界各国・各地から訪れた外国人研究者・留学者を快く受け入れ指導にあたられてきたことです。山村先生のご指導によって、日本の温泉についての理解が広まるとともに、日本の温泉についての関心と興味が高まったこと間違いありません。

「ドクトル・オブ・ホットスプリング」の称号に相応しい山村順次先生のご逝去を深く悼み、日本における温泉研究がさらに発展することを願っています。

山村順次さんとの交流

由佐 悠紀

(名誉会員・別府温泉地球博物館・
京都大学名誉教授)

1990年代の初め頃、別府市では、温泉に関する知識を収集整理し、それらを広く発信しようとする計画が立案され、そのための施設の建設を検討する二つの委員会が設置された。地球科学に関する委員会と人文・社会科学に関する委員会である。そして後者の委員長に山村順次さんが就任された。私(由佐)は前者の委員長に指名されたが、後者の委員

も兼ねることとなり、その会合で初めて山村さんとの面識を得た。そして、山村さんが別府出身で、私と同年代(私より1歳年長)であること、学生時代に京都大学地球物理学研究施設(別府市にある；現在地球熱学研究施設；私の職場であった)を訪ねたことがあるなどをお聞きして、なんとなく仲間意識みたいな親しさを感じた。二つの検討委員会の作業は順調に進み、地球科学館と温泉博物館を併設するという結論に達したのだが、諸般の事情から計画は頓挫した。

他方、その頃、山村さんは人文・社会科学的な面を主体とした温泉研究の学会の構築を考えておられて、雑談などでその話題がしばしば出た。先行の「日本温泉科学会」にその場を求める考えもあったが、やはり皮衣は新しい方が、というような話をしたことを思い出す。山村さんは培ってこられた人脈を基に、「日本温泉地域学会」の設立を主導され、2003年5月に実現した。この間の事情等は機関誌『温泉地域研究』の創刊号の巻頭に記されている。

また一方、私は「日本温泉科学会第56回大会」と「国際温泉科学会(SITH)第38回大会」の共同大会を2003年9月末に別府市で開催する役目を負っており、多方面にそのご協力をお願いしていた。新しい学会の設立早々、山村さんは自ら一般講演に登録され、「日本における温泉地の地域変容：Regional Changes of Spas in Japan」という題の講演を行って、この共同大会を支えて下さった。

続いて山村さんは、私が言うまでもなく、新学会の発展に力を尽くされた。その一つが「温泉観光士養成講座」の開講である。2004年5月に草津温泉で開催された第1回講座以来、山村さんの推薦によって、私は「温泉地学」を担当してきた。こうした活動を通して、私は地球科学分野から一歩を踏み出し、温泉への視野を拓けさせてもらったと思っている。

本当にお世話になりました。ありがとうございました。

山村先生の思い出

中山 昭則
(理事・別府大学)

山村先生の突然の訃報に接し未だ心の整理がついていない。筆者の頭の中は先生と過ごさせて頂いた貴重な思い出が走馬灯の如くまわっている。

中でも一番印象に残っているのは2001年9月のことだ。千葉大学で執り行われた学位授与式のあと先生の研究室にご挨拶に伺った。その時「是非自宅に寄ってほしい」とお誘いを受けた。ご自宅では奥様共々おもてなしをして頂いた。帰り道バス停まで見送って下さった先生はサンダル履きであった。そしてバスに乗り込んだ筆者をにこやかにいつまでも手を振って下さった。その姿は今でも鮮明に覚えている。筆者は「研究者として認めてもらえた」と万感の思いがこみ上げ涙をこらえることはできなかった。

先生のご芳名は学生時代から存じ上げていた。『観光地理学』の書籍は幾度か手にしたが、当時は「観光地理学」の授業も無かったので、浅学な学生は「面白い分野だな」としか考えが及ばなかった。勿体ないことをしたものだ。

先生との出会いは1996年の7月のことである。高校教員11年目にして博士課程受験という夢を実行に移す決心が着いた。千葉大学を選んだのは無論山村先生がおられたことに尽きるが、家から近いという邪推な理由も大きかった。「恥をかくのは自分一人がいい」と決め、「当たって砕けろ」と先生の研究室に直接電話を掛けた。本当に無礼なことをしたものだ。

先生は「明日午後なら空いているが来られますか」と無礼者に対して丁寧に対応してくださった。翌日自己紹介とこれまでの経緯、研究したい内容等を説明した。そして「今後観光研究は重要な意味を持ちますから、君の研究テーマを観光的視点でまとめられるのな

ら9月に受験してみてもどうか」とのご返答を頂いた。この時のやり取りも鮮明に覚えている。

門前払いをされても仕方のない見ず知らずの無礼者に対して、このような対応を頂けるとは全くの予想外であった。こちらの方が戸惑うばかりであった。

千葉大学での研究生生活はとても充実していた。先生には筆者の調査に幾度も同行して頂いた。その上先生の調査にも同行させて頂いた。ここでの経験は今の学生指導のベースとなっている。先生は調査の際には小さなスケッチブックを持参されサッサッとスケッチをしておられた。これが実に見事な仕上がりでとにかく達筆だった。もう一点、先生は入浴時間が手とも短い。当初は「温泉研究者なのに…」と思っていたが、その後は「短い入浴時間で何かを感じておられる」と思うようになった。

筆者が「大学で教鞭をとる」という修士課程から抱いてきた夢が叶ったのは、全て山村先生のお陰である。これからは観光地理学および温泉地研究の更なる発展に微力ながら寄与することが筆者にできる恩返しである。

山村順次先生…どうか安らかにお眠りください。

恩師・山村順次先生のご逝去を悼む

小堀 貴亮
(理事・杏林大学)

日本における観光地理学・温泉観光学の第一人者であり、筆者の恩師でもある山村順次先生の訃報に際し、ここに、心から哀悼の意を捧げたい。コロナ禍という未曾有の事態により、なかなかお会いできない状況が続く中で、突然の恩師の訃報を聞き、未だに実感がわかず、とても現実を受け入れることができない。ちょうどコロナ禍の直前に、山村先生のご自宅を訪れる機会があり、いつものように叱咤激励を頂きながらも、東北や九州の湯

治場調査をはじめ、日本各地の様々な温泉地調査にご一緒させて頂いた思い出話で盛り上がったことが記憶に新しい。享年81歳。あのパワフルな山村先生が、幽明境を異にされるにはあまりにも早すぎるお年であり、誠に悲しく残念でならない。

山村先生は大分県別府市のご出身で、地理学者として温泉研究を行うことはまさに天命であったと仰っていたことを覚えている。当時はまだ、観光地理学という分野自体が確立しておらず、そのような中で、未開拓の境地である温泉観光地の研究に着手された際の苦労は並々ならぬものであったとのことである。幾多もの試練を乗り越えられて完成した先生の博士論文「温泉観光集落の発達と構造に関する研究：伊香保・鬼怒川・修善寺・伊豆長岡の比較」が、日本初の観光地理学的研究による学位論文となり、ここから日本の観光地理学研究史が始まったといえよう。

私自身、千葉大学大学院生時代から山村先生の厳しくも懇切丁寧な御指導の下、温泉地をはじめ様々な地域における研究活動にご一緒させていただき、研究に対する真摯な姿勢と観光地理学的研究のノウハウを直伝して頂いた。そして、山村先生の研究成果が日本中の様々な観光地域社会に活かされている様を実感しながら、自分の研究分野に誇りを持ち続けてきた。山村先生には、研究者としてはもとより、社会人としての基本的姿勢も常日頃から身をもって御指導頂き、まさに研究の上での父親のような存在であった。あまりにも大き過ぎる御恩は、言葉では言い尽くせないものである。

ここに、山村先生の観光地理学、地理教育、温泉観光学における偉大なご業績の一端を振り返り、学恩に深謝するとともに、今後、さらなる研究の前進をもって、今まで先生から賜った幾多もの御恩にいつまでも報い続けていくことを、天上に誓いたい。山村順次先生、安らかに。そして、ありがとうございました。

山村順次先生に感謝をこめて

于 航
(城西国際大学)

2021年11月22日夕方、私の指導教官であられた山村順次先生の奥様から、先生がご逝去された訃報を知らされ、頭が真っ白になって、驚きとともに深い悲しみで一杯になり、未だにこの現実を受け止められていない状態です。

日本における観光地理学、温泉観光学の分野で草分け的存在である千葉大学名誉教授山村順次先生のもと、最後の弟子として、学部生から博士課程まで懇切丁寧なご指導を賜り、また社会人になってからも、厚いご支援を頂き、先生が最後に勤務した城西国際大学観光学部の研究室を受け継がしていただいたことは、私にとって、これ以上ない光栄なことであり、深く感謝申し上げます。これからご恩返しをしようという時に、先生を失ったことは、本当に口惜しくて残念でたまりません。

「より幅広い分野から温泉へのアプローチをすること」の必要性和「違う視座特に人文科学の立場から温泉を学問として研鑽すること」の重要性をよく語ってくださった先生が、国内の有志と共に2003年頃日本温泉地域学会を設立されました。当時、私は山村研究室の院生として在籍し、設立準備や学会初期の運営の大変さ、そして学会創設への先生の情熱を目の当たりにし、深い感銘を受けたことを今でも鮮明に覚えております。

また、2010年当時山村先生がお勤めになっていた城西国際大学観光学部をご紹介頂き、それ以来、6年ほど一緒に勤務させていただきましたが、家が近所であったことから、週2回ほど通勤をご一緒させていただくようになり、その折には、学問の話題は勿論、授業のやり方や仕事の悩みなど、貴重なアドバイスを沢山、沢山の頂き、ありがとうございました。そのおかげで、今の教員の私がいまいます。振り返ってみ

れば、幸せな通勤時間でした。私も、先生のように謙虚で学生思いの教員になって、先生からいただいたご恩を学生たちに還していきたいと思います。

山村先生の最後の弟子として、2回退官された後の、先生の研究室の資料整理を手伝わせて頂きましたが、膨大かつ貴重な資料から、先生の日本温泉研究に生涯を捧げる精神が伝わってきました。日本温泉資料館を建立することは先生の夢でした。「別府温泉地獄めぐりを世界遺産登録に」、「『ONSEN』を世界語として普及させる」、「国内のみならず、国際社会に向けて日本温泉の魅力を知ってもらう」など、心に残る先生の力強い言葉でした。自分の力不足であることは十分承知しておりますが、少しでも先生に良い報告できるよう、微力ながらもできることを実行して行くことを誓います。

日本に渡り22年間、学生時代はもとより、社会人になっても、遠く離れた実家の親以上に、親身になって支えてくださった山村先生と奥様は、私の卒業、就職、結婚、出産など人生の節目に、すべて携わって頂いた日本の父親・母親のような存在で、家族であると勝手に思っています。先生ご夫妻と出会えたことは、私の人生最大の恵みであり、生涯感謝し、忘れることはありません。

私は、先生のご恩に報いるためにも、先生から教えていただいた教師としての誇りと自覚、学ぶことへの変わらぬ情熱、それら教訓



伊豆ヶ島温泉にて(2010年12月27日)

を今後の人生に活かし、教育・研究に邁進してまいります。また、次の時代を担う学生を育てつつ、先生のご遺志を継ぐことも、約束申し上げます。

山村順次先生、どうか安らかにお眠り下さい。長い間本当にありがとうございました。

山村順次先生の思い出

濱田 眞之
(理事・国際温泉研究院)

日本温泉地域学会の創設者である山村順次先生が2021(令和3)年11月22日に81歳でお亡くなりになりました。深く哀悼の意を表すると共に、ここの先生との思い出の一文を認めます。

筆者は先生と同じく地理学徒なので随分前からどこかでお目に掛かったことはあるはずですが、最初に親しく言葉を交わす機会を持ったのは1992(平成4)年10月22日の第二回別府市都市計画のうち通り名設定委員会でした。これは別府市を訪れる多くの外国人観光客のために通りの名前を複数の言語で表記してみよう、そのためには通りそのものに欧米のように名前を冠してみようという試みで、東京大学名誉教授の西川治先生、お茶の水大学名誉教授の正井泰夫先生、京都大学の足利健亮先生に山村順次先生と浜田を加えた構成で面白い議論をしました。役人たちの消極的抵抗に遭ってこのプロジェクトは頓挫しましたが、これを機会に山村先生と親しくなりました。先生は『草津温泉観光発達史』(1992年)を上梓されたばかりで、温泉地研究の学者として脂が乗っていた時期とお見受けしました。

先生も筆者も日本温泉科学会の会員でしたが、人文社会科学的な活動が少ないことに不満を覚えていました。

そんな折、2003(平成15)年1月21日に山村先生から電話で人文社会科学も視野に置いた温泉関係のグループを作りたいと連絡が

あり、1月24日に東京八重洲口でお会いしました。この時が日本温泉地域学会現会長である石川理夫氏との初対面でした。

関西大学の保田先生等も文化系の温泉学会を立ち上げようとしているということで、山村先生が話を聞きに行かれました。その結果を受けて、3月4日に当時は八重洲北口にあった日本温泉協会の会議室で当時千葉大の山村先生、ミュール・ワークスの石川社長、東京理科大学の長島先生、日本温泉協会の寺田事務局長、同布山事業部長と浜田の6名で会合を持ちました。山村先生の考えでは大阪の組織は学会ではなく同好会のようなもので、先生の構想している学問的なものではないと言われました。我々の作る学会は学会誌をきちんと出す学問重視で、名称を「温泉地域学会」としたいと提案されました。「温泉地学会」とすると、「温泉・地学・会」と解される可能性があるという理由もありましたが、先生の考えには温泉地域というものを学問の対象にするという考えがあったためです。

これを受けて筆者が3月25日に箱根温泉供給の辻内和七郎社長にこの学会の設立と意図を説明し、発起人になることを了解して頂きました。

最終的には2003（平成15）年5月11日に草津温泉で設立総会が開かれました。山村順次会長、石川理夫副会長、浜田眞之理事長という体制で発足しました。

この設立が大阪の「温泉学会」より早かったために、自分たちのアイデアを剽窃したのだという非難を後に受けました。しかし実際には日本温泉科学会には自然科学系以外の会員はいてもあまり活躍の場はなく、温泉という自然科学現象を研究することは重要であっても、それと同じように温泉地を歴史・経済・地理・文化といった側面から眺めることの重要性を日本温泉科学会は理解していなかったというのが現実です。そのために人文社会科学系の学会が必要だという認識がこの草津温泉での日本温泉地域学会の立ち上げに繋がっ

たのであって、他人様の意見を盗むような真似はまったくしていません。温泉学会より設立が多少早かっただけのことです。

また、学会の名称にしても「温泉学会」などとは名乗りませんでした。歴史のある日本温泉科学会の通称が「温泉学会」であることは、温泉関係者なら誰でも知っていることで、「温泉学会」などという学会ができれば混乱を引き起こすことは目に見えていました。にも拘わらず、日本温泉地域学会の設立を非難した方々は後に「温泉学会」を創設し、これが日本で初めての温泉学会であるという詐欺のような説明をされました。確かに「温泉学会」を正式名称とする学会はこれ以前には存在していませんでしたが、日本には日本温泉科学会も日本温泉気候物理医学会もあり、どちらも長い歴史を持っており、特に前者は略称で温泉学会と呼ばれているので、敢えて「温泉学会」を自称する組織の創設には温泉関係者として違和感を覚えました。

では山村先生が日本温泉地域学会を作った真の意図は何だったのか、先生の著作から探っていきます。

一番簡単なものは日本温泉地域学会のホームページに載っている設立趣意書です。それには温泉地に対する危機感が横溢しています。「私は過去40年にわたって、日本の温泉地の発達や観光産業・入湯客の実態を調査研究し、より良い温泉地づくりの参考になればと思い、一般誌や各種の講演を通じて提言してきました。しかし、一般論としての温泉地のあり方は理解できても、各温泉地の地域的特性を活かした具体的活性策や何から手をつけたら良いのかまでは、浸透しませんでした。」という反省は、学問の対象の定義、その研究のための方法論と実践と発表の場、という意味での学会設立になったわけです。

山村先生の「温泉地域学のすすめ」（第43回温泉経営管理研修会テキスト、2003年）には「温泉と言う言葉は、本来は源泉や浴槽における温泉水、または温泉地名の呼称に使

われてきたし、温泉地は温泉の立地場所であることを言うのに対して、温泉地域とは温泉に関係する諸現象の空間的広がりを言うのであり、そこには自然的・歴史的・文化的・社会経済的・環境的な諸関係が有機的に結びついた地域が存在している。その分析と総合的な体系化が温泉地域学の目標となる。」とあります。

このような理解の上で山村先生は温泉地域学の構築を目論んだであろうことは疑いを入れませんが、ただ先生は実証的な人文地理学者でしたので、頭の中で理屈を捏ねてその生半可な体系的理論を個別の事象に無理矢理当てはめることを嫌うその学問の性質と先生個人の生来の資質を相俟って、膨大な地誌を書かれました。それは『温泉調査報告集(1)』と『温泉調査報告集(2)』となって結実しています。

これらを繙いていくと、温泉地を叙述する場合、雑多な要因を素直に一つずつ眺めることが第一であると分かります。大火などの災害による旅館同市の力関係の変化、近代法の導入で生じる源泉所有の在り方の変化、交通網の発達と温泉地の競合関係、高度成長による意識の変化、地元資本と巨大資本による開発の差異、どれを取っても同一平面上に論じられるものではありませんが、まずはそれを丁寧に記述する手法を採っています。これは体系化の一步というべきものです。そしてその体系化の一端は『観光地理学』の「観光の概念図」(p3, 2010)にあるようですが、詳しい説明をなされませんでした。

また日本温泉協会のアンケート調査を基に莫大な数のデータを処理もしています。面白いことにそこから得られた結論は第一に自然環境、第二に温泉情緒、第三に温泉そのもので、この三つは変わらないそうです。個人的には「温泉そのもの」が筆頭に来て欲しいという願いがあったようです。この点は恐らく多くの日本温泉地域学会の会員の共通した感覚かもしれず、それが我々の偏見になっている可能性も否めません。

天が先生にもう少し時を貸せば、コロナ禍後の温泉地の在り方を論じて下さったのではないかと思います、その課題は我々に残されたものとして、学会活動を継続していきたいものです。

追悼

吉野 妙子

(理事・山形県温泉協会専務理事)

名誉会長山村順次先生ご逝去の報に接し、謹んでお悔やみ申し上げます。

ここ数年、先生にお会いすることがなくなり、いつも寂しい思いでおりますが、お知らせは大変悲しく残念でなりません。

先生との出会いは、1994(平成6)年でしたから、日本温泉地域学会が誕生する9年前になります。当山形県温泉協会開催の「温泉経営管理研修会」において、当時千葉大学教授だった先生から「温泉地の個性・魅力」と題した基調講演をいただき、それがご縁でその後も本県の温泉に関するご教示を沢山いただいで参りました。

当山形県温泉協会が実施している「先進温泉地視察」は、もっと国内温泉地を視察・調査しようとの意識が生まれたのも山村先生の基調講演がきっかけだったように思います。

先生は、穏やかなお人柄で、どんな質問に対してもご自分が永年研究を重ねてこられた温泉地域社会に関する研究に基づく知識をもって適切な助言を与えてくださいました。

平成15年に日本温泉地域学会が設立されましたが、温泉地域社会の持続可能な発展策を研究するという、大きな意義を持つ学会が創立し、初代会長に就任されましたが、今後、国内温泉地の発展に向け、学会はどんな役割が必要とされるか、また、そのためにさまざまな分野の会員の意見を聞くことが必要と熱く語る先生の姿はとても印象深く忘れることが出来ません。

さて、2007(平成19)年7月に、本県の蔵王温泉で日本温泉地域学会の総会が開かれましたが、是非「さくらんぼ狩り」をしたいとの学会事務局からの要望がありました。时期的にはさくらんぼ狩りはそろそろ終わりとのさくらんぼ農家に何とかしてほしいと頼み込み、約10本の樹を実をつけた状態で大事に保存していただきました。

参加された先生方をはじめ会員の皆様が、童心に還ったように樹に登り、「おいしい」と大声をあげて喜んでいましたが、山村先生も日ごろの先生に似合わず、樹に登ったり下りたりして夢中になっておられたことを思い出します。

懐かしい思い出は沢山ございますが、ここ数年の間、先生は健康を害しておられることをお聞きしておりましたが、お元気になられ再びできるものと信じていましたので、お亡くなりになったことは本当に残念でなりません。ここに改めて、心から御礼とお悔やみを申し上げる次第でございます。

山村順次先生との出会いと思い出

内田 彩
(常務理事・東洋大学)

初めて山村先生にお会いしたのは、2009年に山形県蔵王温泉で開催された第9回大会でした。温泉研究の第一人者である先生とお話したときは、とても緊張したことを覚えています。大学院修士課程に在籍していた私にとって、『日本の温泉地—その発達・現状とあり方』(日本温泉協会、1998年)をはじめとした先生のご著作は、研究に欠かすことのできない先行研究であるとともに、丁寧な資料収集、緻密な分析方法に多大な影響を受けていました。

この時以降、全国大会では受付をお手伝いしましたが、印象的だったのは名簿の作成、参加者の部屋割り、会計など、すべての受付業務を山村先生が中心となり行っていたこと

でした。当時は会員数も現在ほどは多くありませんでしたが、それでも、大変な業務量だったと思います。ハプニングや時には帳尻の合わない会計に頭を抱えながらも、いつも受付のスタッフを気遣い、優しく声をかけてくださいました。最後に「苦勞をかけたねえ」という表情で少し眉を下げられながら、笑顔でありがとうと言ってくくださる姿を今でも思い出します。地域とともに、また多くの人々が参加しやすい会にするために、見えないところでも心を砕いておられたように思います。

山村先生は温泉地に関する総合的な研究の場であるとともに、各温泉地の諸問題の解決に寄与すること、温泉研究の成果を地域に還元することをめざして日本温泉地域学会を創立されました。そして、研究者だけの学会ではなく、温泉地域の人々と、また温泉を愛する人々とともに、温泉地域の未来を発展させるための英知を結集させることに力を尽くされました。先生のご指導を胸に刻み、温泉地域の発展にむけて努力してまいります。

山村先生、ありがとうございます。心よりご冥福をお祈りいたします。

人生を決めてくれた1本の電話

鈴木 晶(陳晶)
(理事・別府大学)

あれは、今から12年前の2月のことでした。仕事先での昼、私の携帯電話に呼び出し音が。ふと見ると、画面に山村先生という文字が浮かんでいたの、急いで対応に出ると、「陳さん、別府は好きですか」との声。一瞬、何の事かと分からず、頭の中で乏しい日本の地理を浮かべ(別府?大分?温泉?)目まぐるしく思い巡らせていると、続けて「別府は私の故郷で、とても良いところですよ」と。何がなんだか分からず、また頭の中は(暇と時間はあるけれど、別府なんて遠すぎて、いくらお金かかるのかしら…)。

今想えば、この1本の電話が私の人生を決めてくれたのです。

その頃、まだ不安定な非常勤講師だった私は、夫と埼玉県桶川市に住んでいました。それがまさか今別府に住んで、大学教員でいられるとは思っても見なかったことで、山村先生の「別府大学へ行って見ないか」とのお誘いは、それほど衝撃的な出来事でした。

先生、本当に本当にありがとうございます。こうして今ある私は、山村先生の“おかげ”と言っても過言ではありません。

そしてこの12年、どのように恩返しをしたら良いのかと、日々考えていたところへの突然の訃報。悲しくて、辛くて、寂しくて、切なくて、日本語でどう表現して良いのかわかりません。

先生の我が子を慈しむような眼差しと優しいお顔、慈愛に満ちたお言葉、誰に対しても変わらぬ大きな御心。そんな先生のお姿を、今もこれからも、私は決して忘れません。

どうか、やすらかに眠りください。

山村順次先生を偲んで

谷口 清和
(理事・温泉地活性化研究会)

『温泉界の巨星落つ』・・・山村順次先生の訃報をお聞きし、先ず感じたのはこの言葉だ

った。いや、巨星になったのかも知れない。死してなお薫香の諸氏を天空より導き照らすことだろう。

山村先生との出会いは私の様な地学・理学畑で無いものにも温泉科学の門戸を開いた瞬間であった。山村先生との思い出は沢山ある。学会視察会で日本全国の温泉地を視察同行したことは貴重な思い出・財産となっている。温泉の深い知識を、決して奢らず出しゃばらず朴訥と語る姿は今でも目に焼き付いている。

中でも、一番の思い出は、2010年10月、私の縁で東北新幹線新青森駅開業の関連事業として青森県を代表する温泉地「星野リゾート古牧温泉青森屋」で開催された「上北地域温泉フォーラム」の基調講演に招聘した事であった。そのシンポジウムで、温泉地活性化活動家として、同じパネリストとして壇上に並んだことは生涯の荣誉でもあり、温泉科学の師とも仰ぐ山村先生と同じ壇上に立つことの重みを感じたものであった。石川副会長(当時)がコーディネータを務め、山村会長(当時)、私、古牧温泉支配人(星野リゾート)の4名でのパネルディスカッションはあっという間に終わり、夢の様なひと時であった。勿論、パネルディスカッション後は、古牧温泉名物の「浮き湯」を一緒に味わう(入浴)など更なる夢が続いた。



2010年10月上北地域温泉フォーラム
(古牧温泉)



2011年11月第18回研究発表大会
(浅虫温泉)にて

ただの温泉好きの私を、温泉地域学の視点へ導いて下さった日本温泉地域学会の諸先輩方を率いていたのが山村先生であった。そのど真ん中の山村先生を失ったことは誠に残念でならない。しかし、山村先生の残した足跡・功績は色褪せることはない。

日本温泉地域学会誌『温泉地域研究』創刊号に山村先生は「……本学会は温泉地域の科学的実証研究を推進するとともに、その成果を活かして温泉地域の諸問題の解決に対して前向きに対応し、**温泉地域社会の持続可能な発展策を検討する**といった大きな意義も有している。」と述べ、率先して活動して来たことに深い敬意を表するとともに、山村先生の意思が引き継がれ、温泉地域学の調査・研究から問題の集約・纏へと発展し、将来的には失われていきつつある温泉文化の保存・継承の仕組（温泉地域社会の持続）づくりへと発展が期待される。

山村先生、いましばらく、頭上の星となって私達を導いてください。

山村順次先生を追悼します

山田 等
(理事・聖徳大学兼任)

私が初めて山村先生にお会いしたのは、第2回の日本温泉地域学会であった。老年の余暇活動の研究の一つとして、私は湯治場での老人の聞き取りなどをしてきた。参考文献を調べるうち、山村先生の論文が多く出てきて、そのうちの草津温泉に関するものは特に社会科学的な知見に富むものであった。鳴子温泉で第2回の学会があると知り、すぐ申し込んだ。

懇親会でお会いし、温泉を人文・社会科学の視点から研究することの重要性を語っておられた。何度かお会いする中で、それを繰り返し語っておられた。温泉にかかわる集まりはさまざまである。「温泉」という用語が遊びやお金に関連して語られる中で、山村先生

の主張は、時に熱を帯びて感じられた。学会での発表を促され、社会学者ゴッフマンに倣っての、会話や事例がやや長く書き綴られる形の饒舌体によって、湯治場の人びとのあり様を発表した。

山村先生の「法則」を重視する科学とは趣きが異なったのか、意見を聞く機会はなかった。しかしその後もいろいろな話をうかがう機会があったので、一定程度認めていただけたのではないかと思っている。考えればさまざまな学問分野が参入した学会では、多様な見方が必要になる。山村先生はそれを踏まえ、学会を創設し運営してきたのではないか。いろいろな分野の話が聞ける学会はない。私も少しでも貢献したい。

山村先生、ありがとうございます。

山村順次先生の思い出

西村 理恵
(常務理事・温泉ライター)

私は研究者ではないこともあり、山村順次先生のご高名を知ったのは日本温泉地域学会に入会してからになります。

研究発表大会に参加したのは2006年、鹿児島県霧島温泉で開催された第8回大会からでした。この時、「温泉を研究する」という先生方の姿勢を目の当たりにし、学問は自由であると感じ、そして、どこか窮屈に思っていた温泉メディアの現状から解放されるような心持ちがしました。

はじめて研究発表をしたのが、2012年、長野県松代温泉で開催された第19回大会です。会場では山村先生が最前列にすわっておられ、とても緊張したのを覚えています。後半、台湾四重溪温泉で行ったアンケート調査の結果を発表する段になったところで、山村先生のお顔がニコニコとしてきたように見えました。その後、山村先生が「学会は研究発表がなにより大事」「データをとることが大切である」と話されているのを耳にしました。



熱海で開催された研究発表大会後、伊豆の温泉地視察時。山村先生は船原館でワッツを体験されるなど視察にも意欲的でした
(2010年6月8日撮影)

四重溪の公共浴場前で駆け回るようにして行った聞き取り調査ではありましたが、あの笑顔を思い出すたび、山村先生に励まされているような気がして、今も支えになっています。本当にありがとうございました。

長野県の温泉地の活性化と人材育成に貢献された山村順次先生

徳永 昭行
(理事・長野県温泉協会活性化研究会アドバイザー)

山村先生は、1984(昭和59)年度の長野県温泉協会の研修会で「温泉地志向の変化について」という演題で講演されています。

「これだけの温泉県で素晴らしい自然に恵まれ、自噴源泉がまだ半分もあり、東京及びその近郊地域から見れば、「信州」という郷愁を多く持っている人が多いと思うのだが、残念ながら良い印象の温泉地ベスト20の上

位に入っていない」、とのお叱りともとれる指摘に各支部や温泉地からの相談が相次いだそうです。提言を真摯に受け止め改善を図った温泉地とそうでない温泉地に明らかに差が出たようです。

更に1992(平成4)年にも「保養温泉地のあり方」という演題で講演、鹿教湯温泉の事例に評価をいただきましたが、一方で「パンフレットを配るだけではなく、実際に地域を案内する必要がある。地域の自然、文化、温泉文化、歴史等を全面に出して伝えていくこと。地域住民との触れ合いを通じてリゾートコミュニケーションがこれからは必要になる」とのこと。30年も前の講演内容です。今でも観光キャンペーンでパンフレットやリングを配っている私たちにとって、まだそんなことをやっているのか、と叱られそうです。

長野県温泉協会事務局長の布利幡明子さんによると、長野新幹線開通に伴う長野駅前再開発において、善光寺をかたどった旧駅舎について、「古いものの良いところやノスタルジックなものは残したほうが良い」と先生がおっしゃっていたとのこと。結局旧駅舎は取り壊されましたが、今になって残しておいたほうが良かったという街の人の声を耳にすると先生を思い出すそうです。

長野県温泉協会では、温泉に関するあらゆる知識の充実と適切な実施及び援助を行うことができる者を養成することを目的に、2005(平成17)年度から温泉療養指導士という資格制度を設け、温泉関係者、特に将来の温泉業界を担う方々のスキルアップを目指しています。

講習内容は多岐にわたり、科学的・医学的知識、栄養学、温泉法律学、療養保養、水中運動、温泉観光学、救命法など総講義時間43時間、実習時間8時間、その後試験というかなり大がかりな講習会です。温泉界を代表するような先生方が講師です。その要の講師の一人が山村先生でした。第一期生から八期生まで担当され、約290名が先生の講義を

受け、資格取得後はそれぞれの職場などで活躍しています。

私は第一期生です。講義の一番最初が山村先生の「温泉観光学」でした。受講生の机には先生のテキストと一緒に先生著の「世界の温泉地・発達と現状」と「日本の温泉地—その発達・現状とあり方」いう2冊の本がおかれていました。これ全部勉強するのか！とびっくりしたことを覚えています。私は立場上、先生の各期ごとの講習会にも参加させていただきました。大変光栄なことです。私の松代温泉の紹介を兼ねた名刺に、先生によって提案された資源と利用面を結びつける評価指数である資源指数（宿泊定員1名当たりの温泉量）を記載させていただきました。また、その宿の湯量の比較がわかりやすいので、地域公民館や各種団体等での温泉講習会でも必ず使用させていただいています。

現在も資格取得講習会の講師として温泉保養学概論を担当されている信濃毎日新聞社特別編集委員の飯島裕一さんから、「山村先生は、阿岸祐幸（北大名誉教授・温泉医学概論担当）先生とともにヨーロッパの温泉・温泉保養地を日本に広く紹介した先駆けであり、20年余にわたり温泉全般について温かいご指導をいただきました」という思い出の言葉も頂戴しました。

長野県温泉協会では山村先生の「続けることに意味がある」との言葉を励みに、この温泉療養指導士資格取得講習会の継続を図っていきたい、とのことです。

このように先生は長野県温泉地の発展や、将来を担う人材育成に大きく貢献されました。その功績に深く感謝すると共に心からの敬意と哀悼の意を表します。ありがとうございました。

箱根強羅温泉大会の時の駅前のことです。先生から「職場ではなく個人として会員にならないか」と声をかけていただきました。あれから18年、今の自分があります。

山村順次先生との思い出

齊藤 雅樹
(常務理事・東海大学)

山村先生に最初にお声かけ頂いたのは、よくわからないまま初参加した本学会でした。どこのどなたなのか、よく存じ上げずにご挨拶した私を包み込むような笑顔で温かく歓迎して下さいました。当時、私は別府の仲間と温泉博物館の企画を議論していて、自己紹介の際にその話を申し上げたのですが、もうすでに山村先生が本格的構想を別府市長に提言されていたことを後になって知り、赤面したものです。

大分県九重町の星生温泉での大会では、たまたま車でご一緒して一対一でお話しする機会があり、貴重なアドバイスをいただいたことも良い思い出です。失礼な言動、未熟な提案を咎めることなく寛大に接して下さったおかげで、いまの私があるのだと感じます。

温泉の世界で活動していると、全国の至るところで山村先生のご功績、ご足跡に出会います。あれも先生のご提案、これも先生のアイデアと、山村先生はずっと先を歩まれ、後進の我々に道を示されていたことをあらためて知らされるのです。比喩ではなく、先生は温泉界で生き続け、今も大活躍していらっしゃるのだと実感しています。

これからも変わらず、私たちを導く燈炬であり続けて頂きたいと祈念いたします。

山村先生追悼

赤池 勇治
(理事・静岡県庁)

私が2008年に日本温泉地域学会に入会させていただいた時の会長が山村先生でした。大学関係者でもなく専門家でもない私に、大変やさしく温かな言葉をかけていただいた記憶があります。

先生とは主にメールでのやりとりが多かっ

たのですが、会長という要職にありながら、研究発表大会における学会指定宿の希望リクエストや、学会誌への投稿原稿の受け渡しなどにもお忙しく対応されていたことを思い出します。そのような中でも、私が仕事の都合で日本を離れ英国に滞在していた際には、英国バース温泉について少し調べてほしいと連絡をくださったたり、帰国後も学会のために頑張してほしいと励ましてくださったたりと、いつも気にかけていただきました。

私事ながら、2021年4月から大学院修士課程で「持続可能な温泉地」をテーマに、研究を始めました。今回の訃報に接し、先生が書かれた、2003（平成15）年3月1日付「日本温泉地域学会設立趣意書」を改めて読み直したところ、「持続可能な温泉地のあり方について総合的な視点から議論がなされてきたのか」という問いかけがありました。SDGsという視点が求められている昨今ですが、先生は当時から問題意識を持っておられたのだと再認識しました。先生の温泉に対するまなざしや、常に心に抱いていた想いを、少しでもこの先に繋いでいきたいと思います。

山村順次先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

山村順次先生の思い出

樽井 由紀
（幹事・奈良女子大学）

山村先生との出会いは、私が温泉研究の論文を最初に書いた時に手に取った先生のご著書『新観光地理学』（1995）です。

論文が活字となった2012（平成24）年、下呂温泉で開催された日本温泉地域学会大会に参加し、そこで先生と初めてお会いしました。「これから温泉研究、頑張ってくださいね」と優しく声をかけて頂き、先生の温厚で暖かいお人柄に触れることができました。初めての学会参加で、知り合いもなく不安な気持ちでいっぱいでしたが、先生の励ましのお

言葉のおかげでこの学会に自分の居場所を見つけることができ、研究への意欲も増しました。

その後、研究のための文献を探すといつも出会うのは、先生のさまざまなご著書やご論考でした。その度に先生の莫大なお業績に驚き、尊敬の気持ちは増すばかりでした。

私が申すのも僭越ですが、もし先生の存在がなければ、人文社会科学的な温泉研究の重要性や意義が我が国でこれほど広く認知されることはなかったのではないのでしょうか。よく言われることですが、まさに先生は温泉研究のパイオニアです。その偉大さに感謝しつつ心からご冥福をお祈りいたします。

山村順次先生追悼

高橋 祐次
（幹事・東洋大学大学院）

私が初めて山村順次先生にお会いしたのは、2011（平成23）年5月22日（日）～23日（月）の第17回研究発表会・総会でした。会場は、湯河原温泉湯河原町観光会館の会議室、宿泊施設は「ホテルあかね」でした。

当時、私は仕事の関係で大阪に単身赴任をしておりました。2か月前に発生した東日本大震災は、東北・関東地方とは温度差はあるといえ、周りは閉塞感が漂っていました。温泉好きの私にとっても、温泉を楽しむ雰囲気ではありませんでした。

このような時期、学会事務局から『温泉地域研究』が送られてきました。巻末の次の研究発表大会・総会の案内が目にとまりました。温泉好きとはいえ、素人の私には、学会の敷居は高く感じられ躊躇しましたが、新大阪から新幹線と在来線で一本でしたので、思い切って申し込みをしました。

学会においては、入会資格が厳しいところも多いなか、日本温泉地域学会は、温泉に興味がある者なら誰でも入会できるアットホームな学会で、実際、湯河原町の源泉地区の視

察に参加した際、すぐに溶け込むことができました。これも、山村先生の方針だとお聞きし納得した次第です。

それ以来、今日まで研究発表会・総会は参加（黒川温泉大会のみ欠席）させていただいております。浅虫温泉大会後のエクスカージョンで、東鳴子温泉大沼旅館で宿泊した際、懇親会・湯巡り・朝食をご一緒させていただいたのも、良い思い出となりました。ただの温泉好きの素人にも、分け隔てなく接していただき感動しました。山村順次先生との出会いが、私の温泉に対しての方向付けをしてくれたと思っています。

現在、温泉活動していくなか、手元にあるのが『新版日本の温泉地 その発達・現状とあり方』（日本温泉協会）です。平成10年発行の新版です。人前で話すとき、必ず参考にするのが、山村順次先生のこの著書です。この著書には、平成10年以降の記述がありません。平成・令和時代の温泉地、コロナ禍の温泉地を先生は、どのような見方をされたのか、どのように表現されたのか、今となっては叶わないことで残念でなりません。山村先生は、多大な功績を残されてきました。これからも、少しでも先生の域に近づける様、精進していきたいと思っています。

御生前のご厚情に深く感謝するとともに、ご功績を偲び、哀悼の意を表します。



2012年5月霧島大会・温泉観光士養成講座授与式

山村先生の功績と思い出

布山 裕一
(理事長・流通経済大学)

山村先生と初めてお会いしたのは、1986（昭和61）年だった。それは、私がまだ20代で日本温泉協会に入職して間もない頃で、同協会が上梓する先生ご執筆の「日本の温泉地 その発達・現状とあり方」のゲラのチェックと打合わせだったと記憶している。

当時の日本温泉協会の事務局は、東京駅の八重洲北口に隣接した国際観光会館の8階にあった。同協会には他団体に類をみない学術部が設置され、温泉に関連する種々の分野の主要な研究者が名を連ねていた。山村先生は学術部委員に就任されており、後に学術部幹事委員そして学術部委員長を務められている。

2003（平成15）年に山村先生は日本温泉地域学会を設立された。研究者のみならず温泉関係事業や行政・団体関係者など、幅広い分野の会員で構成して社会に貢献できる学会を目指した先生の理念は、今後も受け継がれていくことになる。

温泉に関する山村先生の研究業績は枚挙にいとまがない。温泉地の持つ保養・療養機能に古くから着目され、温泉地の発展過程と地域的特性等に関する研究は大きな業績である。これらの研究は各温泉地における「地域づくり」にとって非常に有益な指針となって社会にフィードバックされている。また、先生は環境省の国民保養温泉地の選定に関する基準の見直しに参画され、国の定める新しい基準の策定においても多大な貢献をされている。

日本温泉協会発行の雑誌「温泉」に、山村先生は頻繁にご寄稿くださった。私が協会の事業を担当するようになってからは、取材や現地調査などで全国の温泉地を先生と共に訪れる機会が増え、数多くのことを学ばせて頂いた。

山村先生の思い出は数々あるが、1996（平成8）年6月、富山県宇奈月温泉で日本温泉協会の年次総会後のことは忘れられない。

総会の翌日、先生は新潟県境に近い朝日町の小川温泉の視察を要望された。私が車の運転をして、先生と協会の新人女性職員の3人で小川温泉を視察して1泊した。次の日は午前中に役場でヒアリングをして帰京する予定であったが、石川と岐阜の両県境に近い五箇山の合掌造り集落、岐阜県白川郷の合掌造り集落、飛騨高山と先生の指示で車を走らせることになった。奥飛騨温泉郷の平湯温泉にさしかかった時はすでに宵闇に包まれていた。当時は安房トンネルが未開通だったので、夜間に峻しい安房峠を下って長野県の安曇村（当時）を経て松本から高速道路で東京へ向かい、新宿駅で先生と職員を見送って帰宅したのは深夜になっていた。この日は約600kmの走行で、行程の半分ほどは一般道の峠道が多かった。トータル十数時間の運転はかなりハードであったが、山村先生の飽くなき探究心と行動力、そしてバイタリティに感服したと同時に自分の目で見て体験することの重要性を学ばせて頂いた。

ここ数年山村先生は療養されており、お目にかかる機会に恵まれなかったが、長いお付き合いをさせて頂き、心から感謝申し上げます。先生のご冥福をお祈りいたします。

山村順次先生を偲んで

古田 靖志
（理事・下呂発温泉博物館）

私が岐阜県博物館の地質担当学芸員として勤務しておりました時、山村先生より「日本温泉地域学会」を設立するので、その発起人の一人としてお願いしたいという旨の連絡をいただきました。学会ホームページの趣意書にありますように、先生は、「温泉を取り巻く現状には、社会科学と自然科学の両面から解決すべき多くの課題が山積しており、両者

を融合した研究の場が必要である」こと、そして、新たな学会は、「ハードルの高い研究のための学会ではなく、研究者のほかにも温泉を生業とする関係者や団体、行政、温泉地づくりに関心のある一般市民など、参加者の裾野を拡げ、自由な議論と情報交換を進めることにより社会に貢献できる会であること」の必要性を熱く語られました。まだ若かった私にとって、学会の発起人として声をかけていただいたことを嬉しく思いましたし、先生から「自然科学の人は少ないので、どんどん研究発信をして、学会を盛り上げて下さい」と期待のお言葉をいただいたことは大変励みになりました。

初めて山村先生にお会いしたのは、草津温泉で開催された第一回温泉地域学会創立大会でした。先生はまさに温厚篤実なお人柄で、お話の内容も極めて誠実でした。人文地理学がご専門の先生は、「研究は、きちんとしたデータを集め、そこから客観的に何が言えるか考察することです」と言われました。私はそれを聞いて、人文分野の研究も自然科学の研究も基本は同じであることを理解するとともに、基本的にはそういった姿勢で人文分野の研究にも接していけばよいのだと安堵したことを覚えています。それ以来、先生のお人柄に惹かれ、「温泉の地域研究」に関する研究発表や数々の研究成果刊行物で多くを勉強させていただき、温泉への理解やアプローチの仕方を拡げることができました。

日本温泉科学会において、一般の人々を対象とした温泉に関する啓発書『温泉学入門』を出版することが決まり、岐阜県博物館で開催した『温泉展』の図録をもとに何名かの自然系の先生方に詳しく加筆していただくことになりました。その折に、外国や日本の温泉地や温泉文化に造形が深い山村先生にお願いして、「世界の温泉と温泉文化」「日本の温泉と温泉文化」の2章を新たに付け加えていただきました。大変お忙しいさなかでしたが、先生は決して妥協されることなく、最高のも

のを作ろうと精力的に執筆されていたのがとても印象的でした。数々の成果刊行物を拝見してもわかりますが、温厚で誠実なお人柄の裏にある、「真摯な研究を支える莫大なエネルギー」にただただ驚くばかりです。

温泉地域学会の懇親会ではいつも、山村先生は私のような者も含め、誰とでも分け隔てすることなく気さくに「温泉の未来に向けた」お話をしてくださいました。先生のそのようなお姿は、まさに先生の願われた学会設立趣意を具現するものであり、その姿勢は現在の学会へと確かに導かれています。先生の日本温泉地域学会は、ますます発展し、温泉を取り巻く社会に貢献できる学会として勢いを増しています。どうかご安心ください。

先生の在りし日のお人柄とご功績に深甚なる敬意を表し、心からご冥福をお祈りいたします。



辻内和七郎 (元常務理事)

(ご子息辻内和人様提供)

故 辻内和七郎元常務理事を偲んで

大山 正雄

(前日本温泉協会会長)

辻内和七郎さんは2021(令和3)年3月5日に逝去されました。享年88歳です。2020年2月にお会いした時には前立腺癌の治療後で少し痩せていましたが元気でしたし、2021年1月に電話で話をしたのでにわかには信じがたいことでした。

辻内さんは1932(昭和7)年に4人兄弟の長男として神奈川県箱根町で誕生し、1955年3月に慶應義塾大学法学部卒業後、駿河銀行と箱根観光ホテル(現パレスホテル)を経て、1970年に渋谷栄一が設立者の一人であり、後に父親の辻内富士雄が社長を務めた箱根温泉供給株式会社に入社しました。同社に48年間勤められ、1996年に社長、2010年に会長、2018年に相談役を歴任して退任されました。

この間に1879(明治12)年から1981(昭和56)年の約100年にわたる「箱根温泉供給社史(1982)260p」を編纂しました。本書は明治期から昭和時代にかけての火山性蒸気温泉や箱根の開発史です。

今日、火山性蒸気による温泉造成は箱根

町、仙石高原開発、箱根登山、藤田観光、箱根温泉供給、プリンスホテルの6者で行っています。その供給量は毎分約6,000ℓで、箱根全山の22%ですが、その温泉使用の旅館や保養所等の施設は箱根全体の60%に達しています。これにより主に谷間であった温泉が箱根全域で利用できるようになりました。

辻内氏は火山性蒸気温泉の安定供給を計るために神奈川県庁の協力を得ながら前6者からなる箱根温泉蒸気井管理協議会の設立に尽力され、会長を初代から2012年まで24年間にわたり務められました。同協議会は温泉関係者や行政、一般人を対象に外部講師を呼んでの研修会を年3回、1泊2日の県外温泉地視察を年1回行っています。この視察旅行の企画などは主に辻内氏が行っていました。私もこの旅行には度々参加させていただきました。

辻内さんは、日本温泉地域学会(2005年5月設立)の発起人に参加され、理事を2003～6年の1期と常務理事を2006～15年の3期、箱根での第4回と26回研究発表大会では運営責任者(実行委員長)を担当されました。また、中央温泉研究所の評議員と理事を11年、日本温泉協会の監事を16年などを歴任されました。

辻内さんは長年にわたる温泉への貢献により1999年に温泉関係功労者神奈川県知事表彰、2003年に温泉関係功労者環境大臣表彰、2008年に日本温泉協会表彰、2015年に箱根温泉蒸気井管理協議会表彰、そして2021年1月に箱根町自治功労者表彰を受けられ、日本温泉地域学会趣旨の「温泉地域社会の諸課題の解決や貢献」に努められた方といえます。

辻内和七郎さんは当学会の会員にもなられた奥さんの邦さんとはいわゆるおしどり夫婦とも言える仲の良さで、学会や総会などではいつも一緒に参加されていました。邦さんは2年前に逝去されましたが、今はあの世で二人仲良く過ごされているものと思います。

辻内和七郎さんを悼む

濱田 眞之
(理事・国際温泉研究院)

日本温泉地域学会の創設に関わり、2006(平成18)年春季から2015(平成27)年春季大会まで常務理事を務めてくださった辻内和七郎さんが2021(令和3)年3月5日に逝去されました。衷心より哀悼の意を表し、辻内さんの思い出を幾つか述べ、御冥福を祈りたいと存じます。

浜田には温泉業界に親子二代の付き合いの方が何人もいます。辻内和七郎さんもその一人でした。

箱根温泉供給株式会社の社長をされていたお父様の富士雄氏と浜田の父は親交があり、浜田も存じ上げることになり、互いにその父親同士が知り合いという関係で、和七郎さんとはもういつ頃知り合ったが記憶にないほどの長い付き合いでした。頗る険悪な関係という親子も世の中にはいるものですが、それほど多くはありません。親を見て、子供を知れば、一緒にいる時間がそれほど長くなくても、すっかり信用してしまうような仲でした。

箱根温泉供給は昨年NHKの大河ドラマ「青天を衝け」の主人公であった日本資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一と、三井物産を作り千利休以来の大茶人と称された益田孝という二人の財界の超大物が作った会社です。大涌谷の蒸気で温泉を造成し、仙石原を一大温泉リゾートに作り上げるために、この会社は設立されました。

その由緒ある会社の社長をされた辻内和七郎さんは、その名の通り1932(昭和7)年生まれで、1955年に慶応大学法学部を卒業され、お年を召されても、青いスポーツカーのようなアウディを乗り回し、何ともダンディな箱根の名士でした。

人の意見を良く聞く方で、2001(平成13)年に箱根火山の活動が活発になって、大涌谷

で二酸化硫黄が噴出するような事態には東京工業大学名誉教授の小坂丈予先生の意見に従って観測システムを設置して、大涌谷を訪れる観光客の安全を第一に考え、同時に地元のために尽くしてきました。

もう時効でしょうが、2009(平成21)年11月FEMTEC(国際温泉気候連合)の日本大会の時に箱根に来られたチュニジア大使が、出迎えないと秘書を通じて苦情を言ってきたときに、浜田と二人で一芝居打ったことがあります。

当時辻内さんは日本温泉協会の副会長ではなく、常務理事だったと思いますが、取りあえず勝手に副会長に昇格させ、浜田が大使に向かって、「大使閣下、日本温泉協会の会長は別ホテルにいて只今御挨拶のためこちらに移動中でございますので、代わりに先ずここにいる副会長から御挨拶をいたしたいと存じます」と格式張ったフランス語で伝えると、途端に大使の機嫌は直った。最後にはこの時のFEMTEC日本側実行委と日本温泉協会の幹部がチュニジア大使館の晩餐会に呼ばれるようになったのだから、芝居は大成功で、後で辻内さんと二人で秘かに祝杯を挙げたものです。

日本温泉地域学会の大会にはいつも奥様でお医者様の邦夫人と参加されて、学会にはほのぼのとした雰囲気を作って下さっていましたが、その奥様も2019(令和元)年6月に亡くなられ、今は天国で夫婦二人仲良くされているかと思うと、僅かに慰められるものがあります。

書評

河野 忠 著：『弘法水の事典 ―日本各地に伝わる空海ゆかりの水―』

朝倉書店 400頁 2021年11月
定価 8,500円(税別)

弘法水(こうぼうみず)とは「弘法大師が地面を突いて水が湧き出た」などの言い伝えがある湧水で、全国に数多く存在する。中には弘法湯と呼ばれる温泉の泉源もある。弘法水は民俗学的、宗教学的な調査研究の対象として関心を集めるものの、自然科学、特に効果効能の観点からはただのプラシーボ効果として一蹴されがちである。本書は、弘法水を系統的に扱い、溶存成分や湧出量など自然科学的観点から考察したものである。

一見して驚くのは調査対象の多さである。本書のページの8割ほどが「地域編」として全国各地の弘法水1,563件の紹介に充てられている。一つ一つは物件名と写真と、ときに伝承の引用があるシンプルなもの、著者自身の解釈は記されない。著者の考察はもっぱら冒頭2割の「総説編」に集中し、俯瞰的に全体を解説している。個別の弘法水の取り扱いには読者に任せるとのスタンスであろう。タイトルの「事典」の二文字にはそうした著者の思いが込められているようだ。

弘法水1,563件のうち、著者は169件について無機溶存成分の分析を行い、その特徴を述べている。pH(水素イオン濃度)、EC(電気伝導率)、ORP(酸化還元電位)のほか、カルシウムイオン、硫酸イオン、硝酸イオン等に注目し、弘法水が一般的な湧水・地下水とはかなり異なる水質を示すことを明らかにしている。興味深いのは、万病、眼病、皮膚病、長寿など伝えられる効果によって分類し、それぞれに成分の特徴を見出そうとしている点だ。薬が入手しにくい時代に、特殊な成分を持つ弘法水が重宝され、地域で大切に守られた様子が目に浮かぶ。

湯治目的のみならず、書道に使われ上達が

早くなると伝わる「硯水(すずりみず)」に関しても、コロイド粒径やシリカ濃度と筆運びの良さとの関係にまで対象を広げて論じられている。このあたり実にマニアックであり、純粋な読み物としても面白い。

伝説の水に登場する他の人物についても触れられている。安倍晴明、平将門、蓮如、行基など武将や僧侶は、職業柄日本各地を巡礼し伝承や伝説を残しているが、それらの分布を比較すると弘法水の範囲は圧倒的であり、その特殊性がよくわかる。

温泉の研究者には多かれ少なかれフィールドワークの機会がある。温泉地を訪れ、観察し、研究対象を調べるのは実に楽しいが、労苦でもある。回数や訪問地の「数」は競うべきものではないが、可能な限りたくさんの調査地を訪れて経験値を高めたい、自説の精度を高めたいと思うのは研究者の自然な感情であろう。本書の1,563という件数は、一研究者が行ったフィールドワークとしては驚くに値する。写真もほぼ著者が撮影しており、自分自身も地道に現地調査を行わねばと奮起させられる。

ところで、調査に行くだけでも大変なのに、それら湧水を発見・開発してまわった弘法大師の業績はまさに信じがたい。名を借りただけの案件もあるのだろうが、希代のフィールドワーカーであったことは疑いない。著者の河野忠(こうのただし)氏もそれに迫る勢いであるように私には感じられる。余談だが、著者名を早口で発音すると「こうぼうだいし」に聞こえなくもない。長年の研究の集大成を世に出されたことに敬意を表したい。

(斉藤雅樹)

書評

安田浩一／金井真紀著：『戦争とバスタオル』

亜紀書房 376頁 2021年9月
定価 1,700円(税別)

本書は、社会的テーマに鋭く切り込む気鋭のノンフィクションライターと文筆家・イラストレーターの「銭湯友だち」によるイラスト付き「湯けむりエッセイ」である。しかし、楽しいだけの風呂旅ではない。訪れた先を挙げれば、著者の目的や思いもおのずと見えてこよう。

訪れたのは最初に、タイのジャングルに湧くヒンダット温泉。次は、沖縄本島で地下350メートル掘削した弱アルカリ性鉱泉を利用した「日本最南端のユーフルヤー（湯屋・銭湯）」。三番目は、韓国釜山郊外の東萊（とんね）温泉と海雲台（へうんで）温泉を経て、ソウルの伝統的蒸し風呂「汗蒸幕（はんじゅんまく）」のサウナ施設「チムジルバン」へ。四番目は、神奈川県寒川町の旧相模海軍工廠従業員寮を転用した引揚者住宅に2014年まであった幻の銭湯。そこで海軍工廠に勤労学徒動員された人に取材し、その証言に導かれて最後に訪れたのが広島県大久野島の休暇村「せと温泉」である。

一見ばらばらに見える5つの《風呂》には共通項がある。もやもやとした湯けむりの彼方に見えてくるのは、日本とアジア太平洋地域を広範囲に戦禍に巻き込み、多くの人の命を奪い、心身をむしばんだ先の戦争であった。二人の著者は風呂旅で癒されたいと願いつつ、もとより最初から覚悟していたが、《風呂》が呼び覚ます歴史の洗礼も浴びることになる。

最初のヒンダット温泉は、川と温泉に交互に入れる豪快な露天風呂だが、たどり着くまでに乗った鉄道路線はかつて「泰緬鉄道」と呼ばれ、映画『戦場にかける橋』の舞台となったように、日本軍が捕虜とした連合軍将兵約1万2,000人とさらに何万人か数も不明な

アジア人ロームシャ（労務者）が建設の犠牲となった。つまりヒンダット温泉開発にも日本軍が関わっていた。戦時の日本軍将兵のみ許されたつかの間の癒しの湯として。

二番目の沖縄市にある「ユーフルヤー」は本土復帰前の1960年に営業を始め、いま沖縄唯一の銭湯である。ここに50年来の経営者シゲさんや常連客との会話も楽しみに湯仲間が集う。そこにも沖縄戦、米軍統治時代の1970年のゴザ暴動など、今日なお「戦後」になれない沖縄の苦しみが詰まっている。

続く韓国の温泉地と出会う人にも日本の植民地支配の影が色濃く投影されている。本書を通じて言えるが、風呂の内外で出会う人への著者たちの一貫して誠実な向き合い方、取材への情熱もすごい。植民地時代を生き抜いた御年90歳の男性の背中を丁寧に洗い流し、はだかの信頼関係を築くのだ。

四番目から最後の、近年「温泉とうさぎ」をPRする瀬戸内海の小島・大久野島に至る風呂旅も衝撃的で、本書の核となっている。

大久野島が戦争中、国内最大の毒ガス（イペリット）製造工場を持つ要塞だったことは知る人も多いだろう。じつは寒川の海軍工廠でもイペリット弾を製造し、今も不発弾が発見されるという。その毒ガス製造に寒川では勤労動員学徒も、大久野島では少年工員も従事させられた。そして《風呂》浴場は体についた毒ガスの飛沫、においを必死に洗い流す場だったのである。

《風呂》は本来、人が安らぎ癒される平和な避難所《アジュール》であった。ここでは本当に命がけの避難所だったことを本書は物語ってくれる。ぜひ手に取って読んでいただきたい書である。

(石川理夫)

温泉地情報

宮城県大崎市鳴子総合支所の移転と展望

岡村 慎一郎 (元横浜市役所職員)

1 宮城県大崎市の誕生と鳴子温泉郷の庁舎問題

「平成の大合併」以降の市町村数は1,719まで減少したが、広域的な合併も行われた。また、旧市町村時の庁舎を活用したところも多い。一方、この間に大規模災害も起きた。宮城県では、2008(平成20)年の「岩手・宮城内陸地震」、2011(平成23)年の「東日本大震災」等のほか、2019(令和元)年の「令和元年東日本台風」が記憶に新しい。

どの市町村も少子・高齢化等の新たな行政需要への対応が迫られているが、庁舎等の老朽化や耐震化等が課題となっているところも少なくない。

宮城県大崎市は、1市6町により2006(平成18)年3月に誕生した。本庁舎は旧古川市にあるが、同市内には旧鳴子町があり、名勝の鳴子峡(写真1)で知られる。「平成の大合併」前の旧鳴子町役場はJR鳴子温泉駅近くにあり、新市誕生後も総合支所であったが、庁舎は老朽化し、狭い幅員の道路沿いにあった(写真2)。「東日本大震災」の際は床面がひび割れし、この庁舎は懸案になっていた。

2021(令和3)年10月、同市は東鳴子地区に総合支所を移転・新築し、供用を開始した。

2 公民館との複合施設の建設

鳴子温泉郷は、鬼首・中山平・鳴子・東鳴子・川渡温泉の総称で、7種の泉質をもつ国民保養温泉地である。新庁舎は、温泉郷の中の地理や住民分布の点でほぼ中間にあたる。また、JR鳴子御殿湯駅から近く、国道47号とのアクセスも良い。同市は、2016(平成28)年に策定の基本構想や、住民検討会議の意見・アイデアも踏まえ、2018(平成30)

年に基本計画をまとめて新庁舎を着工した。

この特色として、老朽化した総合支所と公民館を合築して複合施設化した点がある。これにより、施設の延床面積や維持管理費の削減、隣接するスポーツセンターとの連携、公共交通面の結節機能の充実を期した。また、住民に身近な市民福祉課と観光等に関わる地域振興課を公民館とともにこの施設に集約したほか、災害時の指揮や避難所の機能を強化した。

3 施設整備と基本理念との整合性

同市は4つの基本理念を柱に庁舎整備を図った。新築により庁舎と公民館の耐震・安全面での“防災性”は向上し、スロープやエレベータ設置で人に対する“やさしさ”も整えた。

衆議院議員の期日前投票等の日が視察日となったが、敷設の駐車場にはクルマ利用の来庁者も多く見かけた(写真3)。人の出入りの多い国政選挙を開所まもなく経験したことから、施設全体の“使いやすさ”を同市は確認できたと思われる。

屋根の化粧垂木(たるき)や、内装に大崎市産材を使った吹き抜けの「鳴子モール」(写真4)からは木の温もりが感じられる。また、窓越しの大きなこけしや漆器等の伝統工芸品からは“鳴子らしさ”も伝わってくる。

4 図書室機能の拡充と今後の可能性

JRやバス等の交通機関との連携・強化、移転に伴う鳴子温泉郷全体の調和づくりなど、今後も同市の果たす役割は大きい。もう一つ、公民館の図書室の拡充に触れたい。

2017(平成29)年、新しい大崎市図書館が

開設されたが、鳴子温泉郷からは最も遠い。同市では22箇所への移動図書館を運行するが、旧市町の蔵書等の充実は実際には難しい。

今回の複合施設化では、公民館の図書室機能の拡充も射程に入れ、地域学習等の場の充実、市民交流の活性化のため、図書室やキッズルームのほか協働室等も配置した。鳴子の人づくりの場の創出のため、例えば、温泉郷の絵はがきや写真類等の地元にも埋もれている史料を持ち寄り、語り合い、これらのデジタル化を図れば充実度が増す。同市の特徴の米

づくり等のテーマ性に富むことを取り上げて機運を盛り上げ、協働の輪を広げることもできる。

この図書室は図書館と根拠法が異なるが、教育委員会や総合支所、市民との連携が新たな価値を生み出す。市民のほか温泉郷滞在者に親しまれる施設づくりが始まったのである。

参考資料

大崎市HP・広報誌、同市への照会回答及び鳴子温泉郷観光協会の近刊誌等。



写真1 紅葉の名勝 鳴子峡
(注) 2021(令和3)10月筆者撮影、以下同様。



写真2 旧大崎市鳴子総合支所
(旧鳴子町役場)



写真3 新大崎市鳴子総合支所の外観



写真4 総合支所内の「鳴子モール」
(注) 左が総合支所・右が図書室のある公民館

学会記事

●日本温泉地域学会第36回研究発表大会・総会(別府大会)

日本温泉地域学会第36回研究発表大会・総会・理事会を2022(令和4)年6月5日(日)に大分県別府市の別府大学メディア教育・研究センターホールにて開催します。第一日目の大会終了後の宿泊は参加者各自で手配をお願いし、翌6日(月)午前中にはテーマ別に案内人が率いる小グループ単位での現地視察会(参加自由)を開催します。

このたびの大会・総会は別府大学のご協力を得て、会場は収容定員220名という広いホールにおいて開催できることとなりました(120名まで可)。当該施設のコロナ対策方針に従った人数の枠内で開催できることと期待しています。

また、別府市内には一人でも泊まれる多様な形態の宿泊施設が数多く、宿泊については参加者各自で手配をお願いします。開催地の大分県は現在、まん延防止重点措置が解除されていますが、安全対策上、第一日目の大会終了後の懇親会開催については今回の大会でも見合わせる予定ですので了承ください。

以上、大会の開催状況については、参加申込み後も学会ホームページでの大会案内を5月以降常に確認されるようお願いします。参加者は引き続き、事前のコロナワクチン接種やPCR検査による陰性確認などを含めて体調管理に努めてください。

日本の代表的な温泉地、別府温泉郷での開催は、2008年5月18日・19日に開催した第11回研究発表大会以来14年ぶりのこと。参加は約50名でしたが、当時の山村順次会長による講演「別府温泉郷の自然・文化資源を活かした観光振興」と甘露寺泰雄現名誉会員による講演「温泉資源の適正利用と課題」の2つの基調講演とシンポジウム「別府温泉郷の現状と観光振興策」も行いました。その後別府市と別府温泉郷は、温泉資源の持続可能な利用に向けた保護対策、観光ならびに温泉文化の振興に取り組み、インバウンドにも対応して2016年からは「別府ONSENアカデミア」を開催するなど国内外に別府の温泉の魅力について発信しています。別府市(温泉課)は当学会の賛助会員になってくださっています。このたび「別府温泉大学」を提唱されている別府大学において初めて研究発表大会を開催することができました。多くの会員の参加を期待します。

日本温泉地域学会第36回研究発表大会・総会スケジュール

- 開催地 : 大分県別府市北石垣82
 開催日 : 2022年6月5日(日)・6月6日(月)
 大会会場 : 別府大学メディア教育・研究センターホール TEL0977-67-0101
 JR日豊本線別府大学駅前から徒歩約10分(バスあり)。構内に駐車スペースを確保しています
 集合・受付 : 6月5日(日)11時40分～ 同ホール
 参加費 : 一般会員・賛助会員2,000円、学生会員1,000円、会員外2,000円
 別府大学学生・教職員の参加は無料とします

交通案内 : 主な交通アクセスは、理事会参加者は、東京方面からは7時45分羽田発9時25分大分空港着ANA便 / 8時05分羽田発9時40分大分着JAL便、大阪方面からは7時30分伊丹空港発8時35分大分着JAL便 / 7時45分伊丹発8時45分大分着ANA便で、いずれも空港接続バス9時55分発10時36分別府国際観光港バス停着。会場まではタクシーにのりください。総会以降の参加者には、大分空港接続バス12時05分発12時46分別府国際観光港バス停着。ここから会場までマイクロバスの手配を予定しています。なお、今後もコロナ禍の推移次第でフライト及び接続バスの運行について変更があり得ますので、直近の時刻表で確認ください。

昼食 : 大学周辺には食堂がなく、事前に空港等で済ませるか弁当を調達ください

研究発表大会に参加される方は、同封の郵便振替用紙で下記の学会事務局振替口座宛に、銀行振込の場合は下記のゆうちょ銀行の学会口座番号宛に相当金額をいずれも5月9日(月)必着で前納ください。払込み完了によって正式に学会参加申込みとします。

本年度年会費(賛助会員3万円、一般会員4,000円、学生会員2,000円)未納の場合は同時に振り込んでください。その際、郵便振替用紙の記載欄に振込額の内訳(参加費、年会費。未納分の年会費振込の場合は年度の内訳)を必ず記入ください。

また、ゆうちょ銀行振込の場合には、振込の内訳が記されませんので、今大会より新しく設けたグーグルフォーム「日本温泉地域学会第36回研究発表大会・総会(別府大会)の出欠について」(後述の案内参照)に出欠確認と共に必ず内訳を記入ください。

従来どおり郵便振替で参加を申し込まれる方も、事務局で大会参加・払込の全体状況を迅速かつ転記ミスをなくして正確に把握するために、可能な限り同グーグルフォームにての出欠確認を併せてお願いします。

大会参加のみ : 2,000円(学生:1,000円)

郵便振替口座番号: 00190-6-462149

ゆうちょ銀行 : 口座番号: 金融機関コード9900 店番019 預金種目 当座
店名 〇一九店(ゼロイチキウウ店) 口座番号 0462149

加入者名 : 日本温泉地域学会

●グーグルフォーム「日本温泉地域学会第36回研究発表大会・総会(別府大会)の出欠について」からの大会申込み方法(学会HP「大会案内」にも掲載)

・URLからの申込み: <https://forms.gle/27PDkzbzQAnkJE8w8>

・QRコードからの申込み



今大会から新たにグーグルフォームからの大会申込み方法を加えました。これは他の金融機関からの振り込み、インターネットバンキングを利用した振り込みに対応するとともに、事務作業の効率化を目的としています。従来の指定用紙による郵便振替からの払込の場合も、可能であればグーグルフォームからの大会申込みを同時にしていただき、大会運営の円滑化にご協力をお願いいたします。

日程

- 6月5日(日) 理事会・総会・研究発表大会(別府大学メディア教育・研究センターホール)
- 11:40 会場のホールにて受付開始
- 11:50 理事会(昼食用意)
- 13:10 総会
- 13:50 研究発表大会・講演
- 17:40 大会終了
- 6月6日(月) 別府温泉郷現地視察会(テーマ別小グループ:詳細は学会HPで案内)

研究発表大会・総会プログラム

6月5日(日)

自由論題 発表時間:20分(発表15分、質疑5分)

座長:池永正人(長崎国際大学)

- 13:50~14:10 中山昭則(別府大学)・別府大学研究サークル「旅と地域の研究会」:「地域との対話そして地域からの発信~私たちの実践」
- 14:10~14:30 小堀貴亮(杏林大学):「温泉地との地域連携による大学観光教育の実践と課題~杏林大学・東伊豆町ウェルネスツーリズムプログラムの事例」
- 14:30~14:50 于航(城西国際大学)・王艶平(中国東北財經大学)・畢燕(中国南寧師範大学):「温泉の癒やし効果ーウェルネスへのアプローチ」
- 14:50~15:00 休憩

座長:内田彩(東洋大学)

- 15:00~15:20 廣瀬勝(わいた温泉郷豊礼の湯):「熊本県わいた温泉郷における地熱開発と問題点」
- 15:20~15:40 浜田真之(国際温泉研究院):「山村順次先生に学ぶ温泉地分析の手法」
- 15:40~16:10 トークセッション
斉藤雅樹(東海大学)・別府八湯温泉道実行委員会・九州温泉道実行委員会・紀泉温泉修験道実行委員会・静岡県温泉協会:「別府・九州・紀泉・静岡の広域温泉スタンプラリーの意義」
- 16:10~16:20 休憩
- 16:20~17:00 講演Ⅰ 由佐悠紀(別府温泉地球博物館館長・京都大学名誉教授):「別府温泉の地学的概要」
- 17:00~17:40 講演Ⅱ 飯沼賢司(別府大学文学部教授):「別府温泉と別府温泉大学」

- 上記の大会の発表者で未送付の方は、大会発表要旨集に掲載するワード原稿(各見開き頁:タイトル・発表者氏名・肩書、掲載図版を含めて40字詰め×75行以内で)を4月15日(金)までに編集委員会(編集担当メールアドレス mi-ishikawa@ac.auone-net.jp)宛にメール添付にて送付してください。
- 前回の第35回研究発表大会・総会は2021年11月28日に群馬県中之条町ツインプラザにて開催。夜は四万温泉やまぐち館に宿泊し、翌29日に四万温泉現地視察会(自由行動)を行いました。2020年春季開催予定だった同大会はコロナ禍により2度の延期を経て実現しました。これは会場を確保くださった賛助会員の四万温泉協会、地元中之条町のご協力・ご尽力の賜で、

感謝申し上げます。参加者は、研究発表と共に大会運営に協力くださった高崎商科大学萩原豪ゼミ学生を加えて90名以上となりました。

- 2月11日・12日に熱海市にて開催予定だった第6回熱海温泉観光士&第10回温シェルジェ養成講座はコロナ禍により開催を中止しました。50名を超える受講申込者の皆様には次の温泉観光士養成講座開催に向けて努めたいと思います。
- 次号の学会誌『温泉地域研究』第39号(2022年9月下旬刊行)への論文・研究ノート・温泉裁判例研究・書評・資料・温泉地情報などの原稿を募集します。必ず**投稿規程と執筆要領(学会ホームページに掲載)**に従い、直接編集委員会(編集担当メールアドレス mi-ishikawa@ac.auone-net.jp)宛に、原稿送付状と本文ワード原稿ならびに掲載図表・画像等は別途添付(本文ではレイアウト指定のみが基本)にて送付してください。

原稿は常時受付けていますので、常に早めの投稿・送付をお願いします。次号**第39号**への**原稿送付締切は6月30日(木)**です。論文と研究ノートは、査読を受けてパスしたものから順次掲載します。会員の積極的な投稿を期待します。

- **既刊論文の訂正箇所について**

前号の学会誌『温泉地域研究』第37号の掲載論文「馬の温泉」の通史的考察—昭和戦前期の時代背景を視野に—所収の16・22頁記載の函館市在住の「村上信夫」「村上氏」のお名前は村山信夫、村山氏の誤りでした。お詫びして訂正します。

- 学会事務局では、創刊第1号から前号第37号まで学会誌『温泉地域研究』バックナンバーを取りそろえています。希望される方は事務局までメール(mikenaga@niu.ac.jp)またはファクスにて申込みください。頒価は一冊1,500円です。ただし、第26号以前の号については10周年記念特集号(第20号)を除き、一冊1,000円(送料別)です。
- 2019年3月刊行の『新版 日本温泉地域資産』も頒価1,000円で販売中です。20冊単位の割引販売委託もありますので、学会事務局までメールかファクスで申込みください。
- **住所を変更された会員は住所変更届を必ず学会事務局へファクスまたはメールにて送ってください。**

『温泉地域研究』の投稿規程・執筆要領

(2017年5月29日改訂)

【投稿規程】

1. 投稿資格

投稿者は本学会会員とする。ただし、連名の場合は筆頭著者名が本学会会員であればよい。また、編集委員会が特に認めた場合はこの限りではない。

2. 投稿原稿

- ①『温泉地域研究』で発表する原稿は、温泉地の研究に関わる未発表のものとする。
- ②原稿の種類は、論文、研究ノート、温泉裁判例研究、書評、資料、温泉地情報とする。
 - 論 文 …………… 実証的または理論的研究の成果として論述した原稿。
 - 研究ノート …………… 温泉地の調査報告、研究の中間発表的内容の原稿。
 - 温泉裁判例研究 …… 温泉資源ならびに温泉地にかかわる裁判例を論述した原稿。
 - 書 評 …………… 新刊書等の批評と紹介をした原稿。
 - 資 料 …………… 温泉地の歴史・文化・温泉資源・観光経営など諸々のデータの提示と解説した原稿。
 - 温泉地情報 …………… 温泉地の観光事情や活性化の取り組みなどの原稿。
- ③論文、研究ノートの原稿は関連分野の学会員による匿名の閲読審査をすることにし、その査読結果をうけて、編集委員会(常務理事会兼務)が掲載の可否を決定する。修正意見がある場合は、修正原稿の提出を経て受理される。
- ④『温泉地域研究』に掲載されたすべての著作については、日本温泉地域学会が著作権を有する。転載・複写にあたっては、本学会の承認を受けなければならない。

3. 原稿の提出

- ①提出書類 原稿一式(本文、図・表・写真)、原稿送付状
- ②提出方法 電子メールに添付して送付する。
- ③提出先 編集委員会 委員長 石川理夫 mi-ishikawa@ac.auone-net.jp
- ④受 付 随時

4. 原稿の校正

初校は執筆者が行い、最終校正は編集委員会が対応する。

5. 抜刷

抜刷は「論文」と「研究ノート」を対象とし、50部、100部単位の実費とする。なお、筆頭著者には、当該『温泉地域研究』を1部追加進呈する。

【執筆要領】

1. 本文

- ①原稿は、ワード(Word)を使用し、A4版用紙を縦にして1段組み横書きとする。
- ②原稿の構成は、表題、著者名(肩書)、キーワード、本文、注・参考文献とする。なお、表題、著者名(肩書)、キーワードは英語併記する。
- ③1頁の文字数 40字×40行=1,600字(刷り上がりはB5版2段組みに相当)

④執筆分量(図・表・写真を含む)は、以下の印刷頁数とする。

論 文	8頁、10頁、12頁
研究ノート	6頁、8頁
温泉裁判例研究	4頁、6頁、8頁
書 評	1頁
資 料	2頁
温泉地情報	1頁、2頁

⑤字体と文字の大きさ

- ・字体は、本文(日本語)はMS明朝、数字と欧文はセンチュリー(Century)を使用する。
- ・文字の大きさは、タイトルまわり12ポイント、大見出しは11ポイント、以下本文は10.5ポイントとする。
- ・日本語タイトルはMS明朝ボールド、英文タイトルと英文肩書き、キーワードの英文はセンチュリー、本文大見出しはMSゴシックとする。

⑥頁番号は用紙下中央に付ける。

⑦人名や術語等は特別なものを除き、常用漢字および新仮名づかいを使用する。

⑧句点は「。」を、読点は「、」を用いる。

⑨数字(センチュリー)は単数字(1から9)を除き、半角文字とする。

【例】3人 23人

[例]

草津温泉における景観保全の現状と課題

Present Condition and Problem of Landscape Conservation in Kusatsu Spa

中沢 秀夫*

Hideo NAKAZAWA

(脚注)*草津大学(Kusatsu University)

キーワード：草津温泉(Kusatsu spa)・温泉(hot spring)・景観保全(landscape conservation)

1 はじめに(章)

(1) 草津温泉の開湯伝承(節)

草津温泉の開湯については……という伝承がある¹⁾。

⑩単位・年号・標高などを除き、4桁以上の数字には3桁区切りのカンマ(,)を入れる。

【例】125,800人 12万5800人 2017年 富士山(3776m)

⑪年号は原則として西暦を使用し、元号が必要な場合は()に入れる。原文の引用の場合はそのかぎりではない。

【例】2017(平成29)年 …によると「元禄三年(1690)…」

⑫動植物等の学名は斜字体(イタリック)を使用し、可能な限り和名を併記する。

⑬特殊な活字は、斜字体(イタリック)、太字体(MSゴシック)で表示できる。

⑭章・節・項のタイトルは、数字はアラビア数字、字体はMSゴシックとする。

【例】章 MSゴシック 11ポイント

1 はじめに 2 ○○○○ 3 ○○○○ 4 むすび

節 MSゴシック 10.5ポイント

(1) ○○○○ (2) ○○○○ (3) ○○○○

2. キーワード

キーワードは、本文の内容を端的に表現する3～5語とする。

3. 注・参考文献の表記

①注および参考文献の該当箇所は、本文の該当箇所の右肩にポイントを小さくして上付きで¹⁾²⁾…の番号を示す。

【例】…である¹⁾。中沢秀夫²⁾によれば…。

②文字の右肩に記した番号¹⁾²⁾…に関する注・参考文献は、文末に以下のように明記する。文字の大きさはポイントを本文より一つ下げ、10ポイントとする。

- ・著者(編者や訳者等を含む)が複数の場合も、省略せずに全著者名を記す。
- ・同一著者による複数の文献が連続する場合も、文献ごとに著者名を省略せずに記す。
- ・欧文の文献は、書名または雑誌名を斜字体(イタリック)で表示する。
- ・ウェブサイトは、サイト名とアドレスを併記し、閲覧日も明記する。

【例】

- 1) 中沢秀夫(1992)：『草津温泉誌 第2巻』草津町、180-190頁。
- 2) 中沢秀夫(1995)：「草津温泉の町並み保存」『地理学報告』、第5巻2号、15-25頁。
- 3) 1712(正徳2)年自序の寺島良安著『和漢三才図絵』巻第七十六「紀伊」項に「本宮ノ温泉在湯峯」と記す。
- 4) 前掲2)、18頁。
- 5) Barker, M. L. (1982) : Traditional landscape and mass tourism in the Alps. *Geographical Review*, 72, pp. 395-415.
- 6) Paldele, B. (1994) : *Die aufgelassenen Almen Tirols*. Innsbrucker Geographische Studien, 22.
- 7) 長崎県観光統計
<http://www.nagasaki-tabinet.com/public/statistics/> (2017年4月1日閲覧)

4. 図・表・写真

①図と表はワード、エクセル、パワーポイント、写真は .jpg 画像として作成し、本文に貼り込み・挿入せず、別途にまとめて送付する。

②図番号は図1、図2、表番号は表1、表2、写真番号は写真1、写真2のようにする。

③本文における各図・表・写真の挿入希望位置を本文右の余白に朱書きする。

④図・表はそのまま印刷できるように完成されたものとし、大きさと文字のバランスを考慮する。

⑤図・写真のタイトルは下中央位置に、表のタイトルは上中央位置に表記し、図・表・写真の下に出典・撮影日等を明記する。また、地図には縮尺と方位を入れる。



図1 ○○○○○○
(注)○○により筆者作成。



(注)○○により筆者作成。



写真1 ○○○○○○
(注)筆者撮影。2017年4月1日。

日本温泉地域学会役員

名誉副会長 長島 秀行（東京理科大学名誉教授）

会 長 石川 理夫（温泉評論家）

副 会 長 池永 正人（長崎国際大学）

理 事 長 布山 裕一（流通経済大学）

常務理事 内田 彩（東洋大学）

齊藤 雅樹（東海大学）

西村 理恵（温泉ライター）

理 事 赤池 勇治（静岡県庁）

小堀 貴亮（杏林大学）

清水 恵介（日本大学）

鈴木 晶（別府大学）

高橋 陽一（宮城学院女子大学）

高柳 友彦（一橋大学）

谷口 清和（温泉地活性化研究会）

徳永 昭行（長野市開発公社）

中山 昭則（別府大学）

能津 和雄（東海大学）

浜田 眞之（国際温泉研究院）

古田 靖志（下呂発温泉博物館）

山田 等（聖徳大学兼任）

吉野 妙子（山形県温泉協会）

監 事 只野 公康（妙見温泉振興会）

松崎 郁洋（黒川温泉ふもと旅館）

幹 事 北出 恭子（温泉家）

高橋 祐次（東洋大学大学院）

樽井 由紀（奈良女子大学）

萩原 豪（高崎商科大学）

任期：2021（令和3）年11月28日～2024（令和6）年春季大会総会

温泉地域研究 第38号

2022年3月25日発行

編集・発行者 日本温泉地域学会

〒859-3298 長崎県佐世保市ハウステンボス町 2825-7

長崎国際大学人間社会学部池永研究室内

(mikenaga@niu.ac.jp)

電話 0956 (20) 5526

FAX 0956 (39) 4908

振替 00190-6-462149

名義 日本温泉地域学会

印刷所 株式会社エスアンドピー

〒351-0112

埼玉県和光市丸山台 3-1-23-405

Journal of Studies on Spa Regions

No.38
2022.3

contents

Articles

- A Characteristic of Tourism Use of a Day-use Hot Spring Facility
at Furusato District, Kihoku Town, Mie Prefecture, Japan Takumi ISONO (1)
- A Study on Reconstitution of Community-Relationship around Hot Springs Cure Resort
from the Sociological Viewpoint —— A Case of Hijiori Hot Springs Area ——
..... Keisuke NAGAOKA (13)

Memorial Features

- A Memorial Features for Junji Yamamura, Honorary President (25)
- A Memorial writings for Washichiro Tsujiuchi, Former Managing Director (45)

Book Reviews

- Tadashi KONO [An Encyclopedia of KOBO-Daishi Water] Masaki SAITO (47)
- Koichi YASUDA & Maki KANAI [War and Bath Towel] Michio ISHIKAWA (48)

News on Spa

- The Relocation and the Views of Naruko General Branch Office of Osaki City
..... Shinichiro OKAMURA (49)

- Notes and News (51)